

翻刻「縣令雜書」

藤 村 潤 一 郎

「縣令雜書」は大阪經濟大学日本經濟史研究所の蔵書である。大きさは縦二三・四センチ、横一六・一、背の厚さ二・二で、白糸四目綴で角裂があてられている。背にはタイプによる「縣令雜書」が貼られ、その下部に「811/K」のラベルがある。表紙裏の右隅に青色スタンプで「811/K」と二段に横に書かれたラベルがあり、その下に薄水色の紙が貼ってある。この紙は大阪の古書肆今城温古洞の目録からとったものである。

表紙の裏と一丁は袋折りの白紙で後に添付したものである。二丁が原表紙と考えられるが、これは一枚紙で表紙に薄く渋が横に引かれ、左上に小さく「縣令雜書」と書かれている。裏側は白紙で「日本經濟／史研究所／圖書之印」の三行角朱印、その下に「日本經濟史研究所／5754」の横印がある。後者は横朱印にブルースタンプの番号である。三丁が原本文一丁に当るが、表側に「黒正／文庫／大阪經濟大学」の三行朱角印が捺されている。

つぎに三ウ、四オウ、五オウは白紙で、六オから一六一オまで文字が書かれている。そして三六ウ、五五ウ、六八ウ、七三ウ、七六ウ、八七ウは白紙、七五オ、八一ウ、八四ウ、八六オ、一〇一オ、一一四ウは欠けている。欠損部分は前後の文章と繋がりのない部分と推測される。この欠損が製本後のものかどうかは明らかでない。なお七七丁は折目が切れている。

一六二丁は原裏表紙に当り一枚紙で、表側には渋が薄く引かれている。一六三丁と裏表紙内側は後に附した袋折白紙である。裏表紙内側左隅に「今城書店／10・6・30／7・00円」とある。これは最初と最後がブルーブラックのペン書、中央の日付は黒スタンプである。なお表紙は薄茶色である。

「縣令雜書」の内容及び著者の推測については拙稿「日本經濟史研究所蔵『縣令雜書』について」（大阪經濟大學日本經濟史研究所編「日本經濟史研究所經濟史經營史論集」所収）に記しているので、ここでは著者は池田岩之丞（安永九年生・文久元年没）、作成時期は嘉永元年以降と推定される事と、内容に若干誤写と考えられる点があるので、写本と考えられる事を記しておく。

つぎに池田岩之丞関連史料として、通信博物館所蔵、文化二年カ、村井（江戸定飛脚問屋京屋弥兵衛）「大細見」の諸証文之部に次のものが記されている。出雲寺板「泰平武鑑」と「柳本枝」から推測すると天保期のものだろう。

（句読点を附した）

差上申為替金証文之事

一 金九拾五両貳朱

銀貳匁九分九厘

右は 池田岩之丞様江戸御役所が大阪谷町同御役所^ニ為御登御用金、書面之通於当地請取候間、右代り金之儀ハ谷町御役所高橋古助様、川村左五郎様、相沢時之進様^{（中略）}此手形ヲ以御断次第、無相違御納可被成候、為後日為替証文依而如件

年号月日

江戸

京屋弥兵衛

大阪舟越町

尾張屋惣右衛門殿

駿府定便之外間便御請負証文下書

御請負申御金之事

一金何百兩也

右者駿府 御役所江御差立之御用金、槌ニ奉請取候所実正ニ御座候、則無相違御届可申上候、万一於道中火水盜難如何様之儀御座候共、私并ニ為組中急度相弁、少しも御損難相懸ケ申間敷候、為後日依而如件

年号

月日

京 屋弥兵衛

近江屋孝三郎

池田岩之丞様

御役所

御定便御請負証文下書

御請負差立申御金之事

一金何千円也

右者駿府 御役所江御差立之御用金被遊御渡、槌ニ奉請取、(候欠力)則御封印之儘 御定便駿府日野屋久右衛門飛脚之者

翻刻「縣令雜書」(藤村)

正無相違相渡し申所実正ニ御座候、萬一於道中火水盜難等之儀御座候ハ、右久右衛門が弁金御上納可仕候、為後日御取次手形奉差上候、依而如件

年号

月日

京屋弥兵衛

池田岩之丞様

御役所

差上申一札之事

一金

封之儘

但金品

右者東海道嶋田宿御本陣山本寛藏殿へ御差送り金、書面之通奉請取候、然ル上者若於道中異変有之候ハ、急度辨納可仕候、為後日証文依而如件

年号月日

京 屋弥兵衛

近江屋孝三郎

池田岩之丞様

御役所

以上で京屋弥兵衛と代官池田岩之丞の関連史料を終る。以下「縣令雜書」の翻刻については、既述の通り「縣令雜

書」は写本であり、私はこの種の原文書をみていないので、割付けには適当でない部分が多い点を断っておく。平出拾頭、欠字はその儘とし、変態仮名は現行の字体に改め、古体、異体、略体の文字は現行の文字に改めたものが少なくない。本文において脱漏と思われる箇所には（ ）付の、宛字と思われる箇所には「」付の傍註を付し、文意の通じ難い箇所、若くは原本のままに従ったことを示す場合には（ママ）と傍註した。また文字の読み方の判然としないう箇所は（カ）と傍註、判断不明の箇所は（読不明）の傍註を付した。本文中、欠損の箇所は□を以って示し、（虫損、破損）と傍註し、文字を推測できるときには（ ）付の傍註を付した。全文に亘り原本にない句読点を補った。朱書については、「朱書」と書き、関係部分に「」をつけて示した。なお朱書の部分については大部分を8ポイント活字にしたが、これが適当かどうかは若干疑問が残る。また年月日は8ポイントにした方が適当かもしれないが、一応9ポイントで示した。

追記 本稿の作成に当り、大阪経済大学日本経済史研究所は翻刻を、通信博物館は所蔵史料の利用を、許可された。黒羽兵治郎、鈴木亨、山田達夫、橋本輝夫、野村君代、佐々木繁、溝口恵子の各氏のご好意をいただきました。記して感謝したい。

（表紙）

「

（原表紙）

縣令雜書

（本文）

（題簽）

「縣令雜書」

大坂御藏御廻米納方取扱掛御免奉願候書付
私儀、去冬中々持病之疝癰ニ而不相勝、役所迄は々成出

翻刻「縣令雜書」（藤村）

勤仕候得共、兩足引釣歩行難相成、然ル処大坂御藏御廻米納方取扱掛被仰付相勤罷在候処、右之次第ニ見廻難仕、出役差支候間、右取扱掛御免被成下候様奉願候、以上

亥四月

重田又兵衛

堤廻船兼役御免奉願候書付

私儀、去冬中⁶持病之疝癪ニ不相勝、役所迄は^ケ成出勤仕候得者、兩足引釣歩行難相成、然ル処、堤廻船改兼役之儀、此節出水時節ニも向、水防等出役も有之候処、右之次第ニ廻村難仕、出役等差支候^而は恐入候間、右兼役

御免被成下候様奉願候、以上

亥四月

重田又兵衛

〔御勘定奉行衆

御代官

仙九郎惣領

池田弁之丞

鉄五郎惣領

山口政之進

右者、部屋住御番入御吟味ニ付、近々武術御見分有之候得は、罷出候哉否御糺、明日中御申聞可有之候、以上

四月

牧 助右衛門

間宮諸左衛門

内藤隼 人正

花井忠 兵衛

武術御見分、悴儀、痛所有之、難罷出旨申上候書付

私悴弁之丞儀、部屋住御番入御吟味ニ付、近々武術御見分有之候得共、罷出候哉否可申上旨、承知仕候、然ル処、当月八日御断申上候通、痛所有之、罷出候儀難仕奉存候、依之此段申上候、以上

寅四月

池田仙九郎印

風邪ニ付、難罷出間、元ノ手代差出候義ニ付、
申上候書付

今十日、去々丑年地方御勘定帳内突合ニ付、四ッ時御勘
定所江御勘定帳持參可罷出旨、承知仕候、然ル処、私儀
風邪ニ難罷出候間、手代太田原慎蔵差出申候、依之此
段申上候、以上

卯十一月十日

池田仙九郎印

御勘定所

播州多可郡村々荒地起返、困窮立直為御救、桑
苗植増、蚕營方取計方之儀伺書

私御代官所播州多可郡村々は極山中、至而困窮之村方
ニ而、近年は家数人別等も格段相減、其潰百姓之持田
畑は投出し地ニ相成候間、惣作ニいたし候得共、銘々
自分持高同様ニは手入も不行届、連々手余荒地夥數相
増、茅草并松雜木等生茂り、林同様ニ成行候田畑も有
之、其上一跡地所繩結之村方も多、殊ニ退転潰欠落百
姓之御年貢未進之分迫、其村々江引請、他借を以弁納い

たし、其借銀之元利追々相當年増困窮ニ陥り、手余荒
地猶々増、其儘捨置候得は、村々退転可仕は眼前ニ而、
永久御不益之基ニ付、多可郡之内、格別難渋之村々引
拔、式拾五ヶ村、高七千七百六拾貳石余之分、手余荒
地起返困窮立直為御手当、御取箇引下ヶ定免ニ而、去
辰ノ丑迄拾ヶ年之内二段之積、内辰ノ申迄五ヶ年は、
米三千九拾八石余、六ヶ年目当酉ノ丑迄五ヶ年は、米
三百三十石余相増、都合米三千四百貳石余為相納、年季
中手余地高九百四拾石余、年季ニ割合起返、尤其外定
免年季中、歟下御年貢御免、年季明寅年ノは追々一跡
之御取箇相進、御益之趣意際立候様取計候積、去ル辰
年中相伺候処、伺之通御下知相濟、村々一同取計之趣
帰服致し、既ニ当酉年迄ニ、手余荒地之内高五百三十
七石余起返出来、猶追々起返方相励候踏込ニ而致出情、
余程村柄人氣共ニ立直候趣ニ御座候、然れ共右起返候
内ニ地味も宜敷、追々本免入ニ可成場所も多分有之候
得共、中ニは又地味惡敷候而も、無抛割合通不起返
候而は、趣意不相立と存、唯名目計ニ起返候様成場所

も相見候、右鉢之分、當時ハ鉢下御免無年貢故、相統致し候へ共、年季明本免入之節、御年貢相納候儀及難義、其外此上可起返分逆も同様ニ而、又候手余荒等ニ相成、如以前困窮ニ立戻候様ニ而は、折角御取箇引下ケ定免も被仰付候詮不相立、御不益は勿論、百姓共一統不相續之儀、歎敷次第ニ付、右御手当定免村とは不及申、其余之村方逆も地味劣之田畑多有之、いづれも困窮は同様之趣意ニ御座候間、永續之仕法得と勘弁仕候処、衣服は食物住所ニ並び宝^カニ而、人身之助ニ相成候事、莫太之儀ニ有之、然ル処、五畿内又は播州之内ニ而も、海辺平地之場所と違、多可郡は極山中之風土ニ合兼、木綿作出來兼候場所ニ付、前書手余地は勿論、其外之田畑ニ而も、五穀を仕付候^而も、生立無甲斐、仕当ニ不引合場所、又は山入谷入等ニ而、猪鹿之喰荒候所、或は居屋敷四壁其外堤山根空地荒地等ニ桑を植立、追々蚕を營候ニ、御国益は勿論、村々之利潤年々相増、困窮立直、夫ニ随ひ人別等聴候得は、又田畑之手入も厚く行届、永々安心之相続いたし、第一ハ御益

ニ相成候筋ニ付、郡中一同桑植方、蚕營之仕法申教、尤右桑苗之料は、私役所々世話いたし相渡候積ヲ以、利解申聞候処、申談候趣、厚聞請候由ニ而納得致し^御之義、少しも早く植立候得は、夫婦助成も早き儀ニ付、成木之桑苗、但州辺ニ而買入、当冬々手始いたし、以來年々植立、何卒四五ヶ年之内ニは、支配所一同多分ニ植殖し、農業之間十分ニ蚕を營、子孫永久申伝へ相續致候様可相励旨申之、小前末々之者は別^而一同甚差^{（ま）}ははり、最早桑苗聞合手当等もいたし元氣も得、右ニ付^而は、外農事^也も勢能く相励罷在、出情之程奇特ニ付、当冬分桑苗手当等は、差懸候儀故、私役所諸人用之内を以、取替置申候、然ル処、多可郡惣高壹万貳千石余之内、桑苗植苗植立候場所、凡ニ見込、先格五万本程之積、其分御手当定免年季当西冬々來ル丑迄五ヶ年ニ割合為植立、壹ヶ年桑苗凡三万本程、代銀凡四貫八百目程、但三年桑百本ニ付、運賃共代[△]下銀拾六匁程宛之積を以、五ヶ年之銀高凡貳拾四

(朱書)

札

「此儀、桑苗実はへ、又は差木等仕立候^而は、急ニ植殖も行届不申、実生^は三ヶ年も相立候苗ニ^而は、早速成木いたし、蚕営も夫丈早く相成、いつれ御手当定免年季中ニ相成^ニ相成、年季明^はは、御取箇相進候^而も、相續相成候趣意ヲ以、利解申聞、村々一同其訳厚く聞請、本文之通取計候儀ニ御座候」
貫目程ツ、相懸候^處、右之分は、兼^而私役所^は世話致し遣し候積を以、利解も申候儀、殊ニ村方ニ^而調植立候様、一通ニ取計候^而は相進不申、不成就之基ニ付、いつれ世話いたし可遺積^之處、御入用之義申上候^而も、不容易御趣意ニ^而、たとへ御下命等御座候^而も、丈夫別段之御費も相立、又御貸附之儀申上候^而も、其分追々返納仕候^而は、折角相励候助成も薄く相成候儀ニ御座候間、当地町奉行所御貸附は、月五朱之利足ニ^而、至^而利安之取扱ニ付、右銀多可郡猪篠村庄屋次右衛門、多田村庄屋仁平次、中村村庄屋次郎兵衛は、兼^而郡中取^メりも仕、貞実成ものニ^而、前書桑苗植方之義、村々ニ抽永久相統之儀を、外村ニ^も厚申教ひ候者ニ付、

右三ヶ村^に銀六拾目為借請、其本金は少しも入用等ニ不為致、私支配所多可郡外之村方并他之御料私領村々^に相成^ニ利足を以為貸渡、利銀取之、町奉行所^に定式之利足為相納、相残候銀子ニ^而桑苗買入、年々植増候^は、御入用も不相費、村々之助成、御救は広太ニ行届候筋ニ^而、尤右之通ニ^而は、一鉢見込之銀高分^は不足ニ候得共、其不足之分は追々教諭之いたし方ニ寄、又冥加を存、百姓共自分ニ入用差出候様ニも可相成儀ニ付、右之趣、郡中^に申聞置候上、町奉行所^に御貸附銀之儀、私^は可及談候^處、一ト通ならざる御救筋ニ付、厚取計、右六拾貫目之内、当十一月^は可貸渡口、五拾貫目当冬貸渡、残拾貫目は追^而溜り銀有之次第、可貸渡旨ニ^而、此節右五拾貫目三ヶ村^は質地差出借請相濟申候

(朱書)

「此儀、前廉申上候上町奉行所^にも、可及相談哉ニ奉存候得共、奉行所之存寄を以、丈夫ニ承り候上ニ^而、可申上積ヲ以掛合候^處、早速此節溜り銀可貸渡旨、

挨拶有之、年延ニ仕候而は、又追而御貸附銀有余之
有無も難計儀ニ付、不取敢爲借請置候義ニ御座候」

然ル処、外ニ^五貸附之儀、村方相對を以貸渡、元利取
立方差滞候而は、厚趣意も行届不申、却而迷惑之筋も
出来可申儀ニ付、右町奉行所^六借請候銀、其儘私役所
^五差出、私方^六外ニ^五貸渡趣意相届候様、世話請度旨、
一同相願右銀私方^五差出候ニ付預置申候

一右桑苗植方之儀、畑方手余地、又は地味劣之場所、其
外居屋敷四壁、空地荒地等も植付候儀は、村^七勝手次
第之事ニ御座候得共、田方之内、地味悪敷、稻作植付
候而も、仕当ニ不引合桑苗植立度旨、相願候分は、田
畑成ニも相成候儀ニ付、其度^八伺之上取計可申候

右之通、御国益并村方永久相統之趣意勘弁之上申談、町
奉行所^九も及相談、貸渡も有之候儀ニ而、尤私役所^九其儘
差出、取^{一〇}り能貸附呉候様相願候儀も、尤之筋ニ御座候
間、願之通被仰付候様仕度奉存候、於然は、右銀五拾貫
目は勿論、此上溜り銀有之次第、町奉行所^六貸渡可有之
分共、私役所^九引上、外御貸附ニ准し、御料私領村^七望

ものハ身元相糺し、質地取之月壹分ノ利足を以、以来
戌^六寅迄五ヶ年之間貸渡、年^七利銀取立之、五朱は村方
^五相渡、町奉行所^九爲相納、残五朱之分は、桑苗料又は
植方ニ付、無抛入用等有之由相願、無相違おゐてハ、吟
味之上相渡、其年^七遣ひ払之訳、村方請取書を以、委細
勘定書相仕立、御勘定所^九差出候様可仕候、何れ前書申
上候趣、弥御下知被成下、郡中差はまり罷在候通取計、
一同出情仕候ハ、御益は勿論、村^七相統之趣意際立候
儀、曆然ニ付、右伺之通被 仰付可然奉存候、尤町奉行
所御貸附銀借請、私方ニ預り置差掛候儀ニ付、急速御下
知御座候様仕度奉存候、依之此段奉伺候、以上

享和元酉年十二月

池田仙九郎印

御勘定所

下ケ札 本文之通ニ候得共、御手当定免年季中ニ不行

△ 届候ハ、年季明候而も爲植立候様可仕候

御附紙

長印 御殿印

書面大坂町奉行^六借請銀、其役所ニおゐて貸附方之

儀は、伺之通取計、其外桑苗植付方之義、荒田畑之内
内畝入いたし、諸作仕付等相成候分は、可成丈田畑
ニ起返、山入谷入、又は格別之惡地ニ而桑苗植付候
ハ、田畑共前々之本免を目当ニ致し、地位等篤
と遂吟味、桑苗成木助成有之ニ随ひ、御年貢納方相
増候様、無油断可被取計候

戊五月

私嫡孫除之儀申上候書付

嫡孫除奉願候覚

御代官

高百五拾俵

池田仙九郎

子七十八才

実子惣領

池田栄之丞

右、天明六年五月病死仕候

次男惣領

池田弁之丞

右は、天明六年五月、次男惣領仕度旨奉願候

ニ付、願之通、同六月被仰付候処、当子七月病
死仕候

三男

元小普請組

奥田主馬支配

川勝伊三郎養子

西丸御小性組

横田筑後守組

当時進物番出役

川勝亀之丞

四男

池田岩之丞

子二十九才

次男惣領

池田弁之丞死惣領

池田錠三郎

子六才

右之外私井弁之丞、男子無御座候

私次男惣領池田弁之丞儀、当子七月病死仕候ニ付、右錠
三郎儀、嫡孫承祖可奉願候処、出生之嗣々虚弱ニ而、至
而病身ニ御座候ニ付、色々養生仕、当時奥御医師中川隆

玄、町医師藤田玄笛療治請候得共、今以相勝不申、成長之程も難計旨、何も断申聞候ニ付、親類共^正も相談之上、此度右錠三郎儀、嫡孫除仕度奉願候、願之通被仰付候ハ、追^而四男池田岩之丞儀、惣領ニ仕度奉願候、依之此段申上候、以上

文政十一子年八月 池田仙九郎書判

村垣淡路守殿

石川主水正殿

遠山左衛門尉殿

曾我豊後守殿

(線朱書)

医師性名書

池田仙九郎

覚

奥御医師

中川隆玄

町医師 藤田玄笛
當時服藥

右之通御座候以上

子八月 池田仙九郎

(朱書)

「粘入封切

美濃折掛」

(朱書)

「見出包紙計」

親類添願書

池田仙九郎

御代官池田仙九郎次男惣領池田弁之丞儀、当子七月五日病死仕候ニ付、弁之丞実子惣領池田錠三郎儀、嫡孫承祖可奉願候処、出生之砌^ハ虚弱ニ^而、至^而病身ニ御座候ニ付、色々養生仕、当時中川隆玄、町医師藤田玄笛療治請候得共、今以相勝不申末々家督相統難仕、御奉公可相勤^ル無御座候ニ付、嫡孫除仕度旨奉願候段、仙九郎申聞候

処、存寄も無御座、願之通被 仰付候様奉願候、左候ハ
、追遍四男池田岩之丞儀、惣領ニ仕度旨可奉願候、仙
九郎奉願候通、被仰付被下置候様、私共一同奉願候、以
上

西丸御小性組

横田筑後守組

当時進物番出役

文政十一子年八月

仙九郎三男 川勝亀之丞

小普請組

長井五右衛門支配

御勘定出役

仙九郎甥 石井勝之進

(朱書)

「下書美濃紙通物

本紙程村通物 美濃折掛」

申渡

御代官

池田仙九郎

名代

吉岡栄之助

子九月

嫡孫願之通

被仰付候御礼

名代

中村八太夫

池田仙九郎

(朱書)

「九月三日、村垣淡路守殿被仰渡候

松平和泉守殿

御禮廻

御勘定奉行不残

御殿詰与頭兩人」

奉願候覚

御代官

池田仙九郎

四男惣領

池田岩之丞

子二十八才

右岩之丞儀

御目見御番入被仰付被下候様奉願候、以上

文政十一子年十月

池田仙九郎

(朱書)

「十月廿八日、林本兵五郎殿ヲ以

岩堀藤次郎殿御受取

」

御代官

池田岩之丞

其方梓岩之丞、明四日五ッ時、同道ニ而自分宅ニ可被相越候

(朱書)

「文政十二丑年」

十一月三日

(朱書)

「右、村垣淡路守殿被仰渡

立会中川忠五郎殿

」

御請

私梓岩之丞ニ被仰渡之儀、御座候間、明四日六ッ半時、

同道ニ而御宅ニ可罷出旨被仰渡、承知仕候、右為御請申

上候、以上

池田仙九郎

名代

十一月三日

田口五郎左衛門

村 淡路守様

御勘定奉行

御代官

仙九郎惣領

池田岩之丞

右、願之通、父仙九郎御役為見習候様、可被申渡候

(朱書)

「丑十一月三日水野出羽守殿御直

村垣淡路守殿御渡し

」

池田岩之丞、御役見習被仰付候ニ付、年始其外御

礼差出候儀ニ付、願書

私惣領池田岩之丞儀、去子十月廿八日

御目見御番入奉願、同十二月廿二日

御目見仕候処、今般私相勤候御役筋見習被仰付候ニ付、
年始五節句月次

御禮其外出仕等之節、御代官同様差出候様仕度、此段奉
願候、以上

丑十一月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切

ミノ折掛」

(朱書)「美濃」

(朱書)「堅八寸二分」

御代官

父仙九郎惣領

一無足 本国近江 部屋住 池田岩之丞
生国武藏

当丑三十才

文政十二丑年十一月 日、父御役見習被仰

423

翻刻「縣令雜書」(藤村)

付候

(朱書)「右短冊六枚」

(朱書)「寸法同断」

御代官

父仙九郎惣領

一無足 本国近江 部屋住 池田岩之丞
本国武藏

当丑三十才

文政十二丑年十二月 日、父御役見習被

仰付候 父拝領屋敷表武番町

法眼坂上

(朱書)「右短冊壹枚右同断」

メ七枚

御殿

文政十二丑年十一月 日部屋住

父御役御代官見習被仰付候

御代官

父池田仙九郎惣領

一無足 本国近江 紋所 上ケ羽ノ蝶 池田岩之丞
生国武藏 抱鷹ノ羽

四三

当丑三十才

(朱書)

父拝領屋敷表式番町

「寸法前同断」

法眼坂上

(朱書) 「右短冊式枚下御勘定所分限掛」

私儀父仙九郎御役 御代官

見習被仰付難有 仙九郎倅

仕合奉存候右御礼 池田岩之丞

(朱書)

「両御丸

御老若不残

奉行衆、吟味役衆

不残、組頭衆不残」

池田岩之丞御役見習被仰付候ニ付、席順之義、
伺書

私惣領池田岩之丞儀、今般私相勤候御役筋見習被仰付
候ニ付、御勘定所並罷出候節、席順之義、如何相心得
可申哉、此段奉伺候、以上

丑十一月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛」

(朱書)

「右席順之儀相伺候處、不及伺、平岡清三郎次席並罷出候様、
中川忠五郎殿申聞、右伺書御下ヶ被成候事

十一月十日

池田岩之丞御役見習被仰付候ニ付、取計方伺書
私惣領池田岩之丞儀、今般私相勤候御役筋見習被仰付
候ニ付、検見或は地方ニ付、見分等ニ私罷越候節は、
御用取計方為見習之、召連罷越候様仕度奉存候、若差
掛私儀外御用向又は病氣其外ニ而、難罷出節は、岩之
丞老人差出度、其節別段相同様ニ而は、彼是日間も相
掛候故、村方用意之手筈も違候ニ付、品ニ寄村方難儀
仕候儀も御座候間、右様之節不及伺、岩之丞老人差出、
其段御届申上候様仕度奉存候

一諸伺書并御届書物、且皆済御届等、私不快差合等ニ而、難罷出節は、岩之丞持参差出候様仕度奉存候

一公事訴詔有之節は、私ニ差添、岩之丞儀、為承候様仕度、私儀外御用向有之候歟、又は病氣其外等之節は、岩之丞老人ニ而も双方吟味いたし候様仕度奉存候
右之通奉伺候以上

丑十一月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切ミノ折掛」

誓詞之儀願書

今般私儀、父仙九郎御役筋見習被 仰付候ニ付、御席次第誓詞被 仰付候様仕度、此段奉願候、以上

丑十一月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

ミノ折掛」

私儀父仙九郎御役
見習被
仰付難有仕合奉存候
右御吹聴

池田岩之丞

(朱書)

「在方御代官

其外」

私惣領岩之丞儀

私御役見習被

池田仙九郎

仰付難有仕合奉

名代

存候右御禮

柴田善之丞

(朱書)

「兩御九郎老若

不残奉行衆

不残吟味役衆

不残組頭不残」

(朱書)

「御殿式枚六枚

下 三枚

中ノ間

差出方

帳面方

ノ五枚

上包ミノ紙半枚ニ而

折掛ニ包差出ス

右印鑑式枚

御殿

御代官見習
印鑑 ○ 池田岩之丞

御代官見習
印鑑式枚 池田岩之丞

誓詞下書

起請文前書

一 此度私儀、父仙九郎願之通御役見習被

仰付候、重

公儀 御為第一奉存聊以

御後閣儀仕間敷事

一 御一門方を始、諸大名諸傍輩江奉対

御為以惡心一味同心仕間敷事

一 御代官所御仕置之儀、及心之程精入、私欲不仕、万事

御為能樣可仕候、惣而御年貢之金銀米錢何ニ而も納

払之儀、可成程入念、無鼠肩偏頗、物每正路可仕事

附、御代官所之内、金銀銅鉄鉛山并野山海川御連上

場出来仕候へ、右同前相心得可申事

一 御代官所毎年檢見入念御取箇之義、及心之程遂詮儀万

事 御為能樣仕、百姓も不困窮樣可申付候、并堤川除

御普請其外御作事御賄等入用之儀、随分吟味可仕候、

惣而被仰付候御役儀ニ付、金銀米錢衣類諸道具一切請

用不仕、其外為礼物不依何受用仕間敷候、勿論手代等

ニ至迫堅可申付事

一 御用之儀、不依何事、御代官衆相談之時、存寄之通、

不殘心底申出 御為能方多分ニ付可申事

附、御隱蜜之儀、他言仕間敷事

一 跡々被仰出候御条目之趣、違背仕間敷候、御代官所百

姓町ニも無油断可申付候、自今以後被 仰出候 御条

目有之は、同事相守可申事

附、公事訴詔有之時、双方申分随分入念及心之程致

吟味、無依怙鼻眞、有赫可申付事

一以御威光私之奢不仕、对百姓町人等、非儀申掛間敷事

附、右箇条之品、手代小もの适常と相守、不作法不

仕様、堅誓詞可申付事

右条と雖為一事於致違犯者

梵天帝釋四大天王總日本國中六十餘州」大小神祇殊

伊豆箱根兩所權現三嶋大明神」八幡大菩薩天満大自

在天神部類眷屬神」罰冥罰各可罷蒙者也仍起請如件

文政十二年十一月 池田岩之丞

村垣淡路守殿

曾我豊後守殿

土方出雲守殿

内藤隼人正殿

(朱書)

「右誓詞本紙は、中程村通物、罰文は牛王之裏ニ認、起

翻刻「縣令雜書」(藤村)

請繼ニいたし候、尤御名之處、牛王之間、白紙之處

あたり候様認ル、写者美濃紙帳面老冊ニ而よろしく、

罰文は不認、真字ニ而罰文と計認、年月日并御名宛所

共、真字ニ而認ル事

但、本紙写共、十一、十二支ハ不認事

一誓詞本紙は、書判は血判之御席ニ而可相認筋ニ候得と

も、左候而は手皿不足混雜致し候間、兼而書判共持参

致し候事

但、誓詞本紙ハ見出名前等も不相認、折目を不付

様くるく巻ニいたし、ミノ紙ニ而上包致し、上包

ハ誓詞計、尤名前も認ル、右写老冊はは御勘定所

御扣ニ成由ニ而、本紙老ト通立写し老冊計ニ而相濟候

事

私儀、父仙九郎

御役見習被仰付

候ニ付誓詞被 池田岩之丞

仰付難有仕合

奉存候右御礼

(朱書)

「奉行衆不残

御殿詰組頭兩人

評定所組頭衆」

誓詞之儀ニ付、申上候書付

私誓詞之儀、先例相尋候処、公事方御奉行所御内寄合ニ

而被仰渡候儀ニ御座候、依之此段申上候、以上

十一月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛」

御城内

杖相用候儀、奉願候書付

私儀、痛所御座候ニ付、不出来之節は

御城内晴雨共、杖相用申度、此段奉願候、以上

丑十一月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛」

貴様御痛所有之候ニ付、御差免之節、晴雨共

御城内御用被成度旨御願ニ付、右之段奉行衆

御目付曲淵勝次郎江、御達ニ相成候事

丑十一月

(朱書)

「右御書付、中川忠五郎殿御渡之事」

夏足袋之儀、奉願候書付

私共儀、下冷仕候間、夏中も足袋相用候様仕度、此段

奉願候、以上

寅三月

池田仙九郎

池田岩之丞

(朱書)

「外在府御代官方御連名」

不快ニ付、難罷出段申上候書付

定免之儀ニ付、御達之儀御座候間、可罷出旨、御廻状之趣承知仕候、然ル処私并岩之丞共不快ニ而罷在、難罷出候間、元ノ手附之もの差出申候、御達可被成下候、此段申上候、以上

卯七月十一日

池田仙九郎印

御勘定所

跡目奉願候覚

御代官

高百五拾俵

池田仙九郎

午八十四才

四男惣領

池田岩之丞

午三十五才

三男

西丸御小性組

翻刻「縣令雜書」(藤村)

酒井美作守組

當時進物番出役

川勝龜之丞

右岩之丞儀、四男ニ御座候處、惣領池田栄之丞儀、天明六年五月病死仕、池田弁之丞儀、文政十一子年七月病死仕候ニ付、四男惣領仕度旨奉願候處、文政十一子年十月願之通被仰渡、同十二丑年十一月御役見習被仰付候

右之外男子無御座候

私儀、去夏中々疝積^(癰)差発相勝不申候、色々養生仕候得共、寒強此節ニ至別而差重、本復可仕跡無御座候間、病死仕候ハ、実子惣領岩之丞^五、跡式被下置候様、奉願候、以上

天保五年年四月

池田仙九郎印

(朱書)「兩印ニ而無之印形計」

曾我豊後守殿

土方出雲守殿

内藤隼人正殿

明榮飛驒守殿

(朱書)

「程村紙堅もの

美濃紙折掛

中ニハ見出不認」

医師姓名

覚

奥医師

中川隆玄

清水殿医師

岡田昌硯

右之通療治請申候、以上

午四月

(朱書)

「粘入半切美濃折掛

跡目願ニ添

」

池田仙九郎

跡御役願書

(釋)

私儀、去夏中々持病之疝積差発、相勝不申候ニ付、藥用仕候得共、当夏ニ至リ塞強、種々養生仕候得共、此節ニ至候而は、迎も快氣可仕跡無御座候間、若病死仕候ハ、倅岩之丞江御役見習被仰付相勤罷在候間、何卒御代官御役被仰付被下候様、奉願候、以上

印

天保五年四月

池田仙九郎花押

曾我豊後守殿

土方出雲守殿

内藤隼人正殿

明榮飛驒守殿

(朱書)

「程村紙差濃

折掛中ハ見出不認

跡目願一同差出」

懷胎之者無御座候書付

私召仕之内、懷胎之者無御座候、以上

午四月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛

中に見出し認跡目願書添ル」

(朱書)

「池田仙九郎」

拙者儀、病氣ニ付、跡目之儀奉願候処、御代官所出羽
国ハ去巳年期月内ニ而、村々取立中ニ御座候、陸奥国
之義は、期月通皆済仕候、米金納拂仕訳帳之外、相洩
候儀無御座候、御勘定合之儀、相違無御座候、依之書
付差出申候、以上

(朱書)

「井上十左衛門印

矢島藤兵衛印」

午四月

池田仙九郎印

矢嶋藤

藏殿

井上五郎左衛門殿

(朱書)

「八寸通物

米金納拂御勘定帳添、矢嶋殿立差出候処、右書面は藤藏殿立

御預り、朱書之通御認メ御調印之上、勘定帳立添、藤藏殿立

御持参

御殿立御差出

立会親類姓名

御勘定

石井勝之進

小普請組

齊藤若狹守支配

山田治右衛門

右之通御座候、以上

午四月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切美濃折掛、判元見届之節差出、跡目願一同差出ス」

一筆啓上仕候、然ハ父池田仙九郎儀、病氣之処、養生不相叶、今廿七日卯ノ刻病死仕候、依之別紙忌服書付相添、此段御届申上候、恐惶謹言

四月廿七日

池田岩之丞居判

名乗

曾 豊後守様

土 出羽守様

内 隼人正様 (朱書)

(朱書) 明 飛驒守様「御月番」

「粘入裏白

美濃紙折掛

忌服御届書入

月番奉行所」

忌服書付

一父

池田仙九郎

忌 午四月廿七日
同六月十七日 五十日

服 午四月
未四月迄 十三ヶ月

午四月廿七日

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切美濃折掛

月番奉行所江御届御状包込

御殿中之間江病死御届書と同様添差出ス、ノ式通」

父池田仙九郎病死御届書

父池田仙九郎儀、病氣ニ罷在候処、養生不相叶、今廿七日卯刻病死仕候、依之御届申上候、以上

午四月廿七日

池田岩之丞印

(朱書)

「粘入半切ミノ折掛

御殿 中之間
御勝手方 二通

御殿中之間へ忌服書付添

美濃紙堅もの

御殿分限掛

知行割 諸入用方

帳面方 何方改

道中方 御取箇差出方

御貸附方

八通 右調印之上出役出

亡父池田仙九郎元御代官所、当分御領所郷村引渡取計伺書

覚

同役池田仙九郎跡目願、判元見届之儀、申上候書付

同役池田仙九郎儀、去夏中々持病之疝積差発相勝不申、種々養生仕候得共、此節ニ至、別而差重り本復可仕体無御座候間、病死仕候ハ、実子四男惣領岩之丞正跡式被下置候様仕度旨、奉願候ニ付、病躰其外相糺、判元見届候処、相違無御座候間、仙七郎病死仕候ハ、願之通、岩之丞跡式無相違被下候様、於私共奉願候、依之申上候、以上

午四月

矢嶋藤兵衛印

(朱書)

井上十左衛門印

「程村堅もの美濃折掛

四月廿六日、矢嶋殿々 村井栄之進殿正差出」

一亡父池田仙九郎元御代官所、当分御領所、出羽、陸奥国村々之儀、跡支配被仰付、郷村諸書物引渡候迄、都而伺書御届類、私名前印形を以、取来候様可仕哉
一諸向掛合等御座候ハ、都而是迫之手續を以、亡父仙九郎名前ニ而掛合之分は、私名前を以掛合、元年附手代名前ヲ以掛合之分は、是迫之通掛合候様可仕哉
一去已御年貢金返納物共、御勘定組御証文、亡父名前ニ而差出、御下知相济候分并是迫差出置候諸伺共、御下知济之上、其儘相用ひ、此以後差出候諸伺類、私名前を以差出、御勘定仕上之儀も、同様亡父名前之分、納札其儘相用ひ、私名前ニ而仕上候様可仕哉

但、是迫之振合を以、亡父元手附手代共差出候様可仕候哉、尤御金蔵、浅草御蔵正早速御断可被下候、左候ハ、御下知相济候上、私印鑑差出候様可仕候

哉

一御年貢其外米金、此以後上納候分、私名前を以上納仕、納札ニ而跡支配引渡候様可仕哉、御金藏も可請取分も、私名前ヲ以請取候様可仕哉

右之通奉伺候、以上

午四月

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「西ノ内紙認、御病死御届一同御名代」「御殿中之間出ス」

御附札 御殿印

書面伺之通たるべく候

御殿 午四月

押切

(朱書)

「午四月廿七日、山本大膳殿を以差出ス、即日

御下知済、川村左五郎持帰ル

亡父仙九郎元支配所村々、諸伺御届等之義ニ付、

伺書

亡父池田仙九郎元支配所出羽、陸奥国村々跡支配被仰付、郷村引渡候迄、都而伺書并御届類、御奉行所其外差出もの等御座候節は、私名前ニ而申上候様可仕哉、奉伺候、以上

天保五午年四月

池田岩之丞印

御附札軍人正印

書面伺之通可為候

午四月

(朱書)

「公事方御奉行所月番差出」

池田仙九郎梓岩之丞跡御役之義ニ付、奉願候

書付

池田仙九郎儀、天明四辰年閏正月廿六日御勘定被召出、寛政元酉年八月廿九日御代官被仰付、出羽国五万石高支配被仰付、同七卯年壹万石増地、上方筋五場所替被仰付、文化七午年六月貳万石増地、出羽国

場所替被仰付、当分御預所壹万八千石余、陸奥国支配被仰付、都合拾万石ニ而当年迄御代官四拾六ヶ年、遠国陣屋詰拾六ヶ年、都合御奉公五拾七ヶ年、無懈怠相勤、支配所取締宜趣ニ而、御褒美も被下置、御益筋且村為等之義、種々申上代検見等相願候義も無御座、当午年八十四才ニ罷成、去夏中々持病差発、本復可仕体ニ無御座候ニ付、忝岩之丞是迄御役見習被仰付、相勤罷在候儀ニ付、家督被下置候上、直ニ御代官被仰付候様、仙九郎奉願候通、被仰付被下候様仕度、奉存候、尤岩之丞儀、文政十二丑年十一月御代官御役見習被仰付、去秋代検見被仰付、当午年迄六ヶ年相勤、御用向取扱事馴、万端相弁罷在、且仙九郎儀、私共同役内ニ而は、年数と申老人之義、年来出情相勤候儀ニ付、何卒格別之御評儀を以、願之通被仰付被下候様、於私共一同奉願候、以上

午月

御同役方

五寸

印鑑
池田岩之丞

〔朱書〕

〔印鑑紙〕

程村七枚

ミノ折掛

私印鑑御達之儀ニ付、申上候書付

覚

一印鑑七枚

右之通差出候間、御金蔵、浅草御蔵、書替所、御貸附所、両伝馬町年寄江御達被下候様仕度奉存候、依之申上候、以上

午四月

池田岩之丞印

御勘定所

申渡

元御代官

池田仙九郎粹

池田岩之丞

同

嶋田八五郎

△

(朱書)

「明榮飛騨守殿被仰渡

下ケ札

名代

矢嶋藤威

同

仙九郎実子惣領

差引

平岡彦兵衛養子

同

竹内平之丞

平岡熊太郎

池田岩之丞

同

名代

山本大膳

右明後十三日五ッ半時

御城立可罷出候、病氣又は忌中候ハ、名代可差出旨、

永井肥後守殿被仰渡候

九月十一日

右は銘々亡父元支配所之義、跡御被仰付候迄、唯今迄

之通相心得、諸事取締等可被申付候、右は松周防守殿

江伺之上申渡候

午四月廿廿八日

△

熊太郎

八五郎

岩之丞

名代

林金五郎

申渡

御代官

彦兵衛養子

父御役見習

平岡熊太郎

同

帶刀養子

(朱書)

「土方出雲守殿被仰渡

村井榮之進

御請

池田岩之丞

嶋田八五郎
平岡熊太郎

殿被仰渡候、若年寄中侍座 (朱書)

天保五年九月十三日 「曾我豊後守殿御差添」

(朱書) 「御檢見御留守ニ付御名代

(朱書) 御代官林金五郎」

「平岡殿、嶋田殿ハ小普請入被仰付候由」

御用之儀御座候ニ付、明後十三日五ッ半時

御城立可罷出旨被仰渡、奉承知候、右為御請申上候、

以上

九月十一日

池田岩之丞
嶋田八五郎
平岡熊太郎

申渡

元御代官

仙九郎惣領

池田岩之丞

名代

林金五郎

土 出雲守様

申渡

御代官

仙九郎実子惣領

父御役見習

池田岩之丞

名代

林金五郎

右跡目被仰付旨、於菊之間、御老中御列座、和泉守

池田仙九郎儀、老年迫数年出情相勤候ニ付、別段之詔
を以岩之丞江御代官被仰付候

九月十三日

(朱書)

「御右筆部屋縁頼 松平和泉守殿被仰渡

土方出雲守殿差添」

申渡

御代官

山本大膳

右は諸事御用向之儀、岩之丞が承合可申候間、申談候様可被致候

池田岩之丞

名代

林金五郎

右は諸事御用向之儀、山本大膳に承合可被相勤候

午九月

(朱書) 「土方出雲守殿被仰渡、村井栄之進差添」

父仙九郎跡式被下置、老年迄数年出情相勤候ニ付、別段之訳、池田岩之丞を以御代官被仰付、難有仕合、名代奉存候御禮、羽倉外記

(朱書)

(朱書)

「丙 御九御老若不残」「十月朔日より三日迄

奉行衆

不残御礼廻り相済

吟味役衆

組頭衆不残

留役組頭迄」

候趣申越候

御駕籠代 壹両

御肴代 壹分

御供方 壹分

御持参御礼申上

十月四日高橋左助」

五八

一筆啓上仕候、然は今般私儀、父仙九郎跡式被下置、父老年、迄数年出情相勤候ニ付、別段之訳を以、御代官被仰付、難有仕合奉存候、右御礼申上度、捧愚札候

恐惶謹言

九月廿一日

池田岩之丞

書判

曾 豊後守様

土 出雲守様

格通

内 隼人正様

明 飛驒守様

一筆啓上仕候、然は今般私儀、父仙九郎跡式被下置、父老年迄數年出情相勤候ニ付、別段之訳を以、御代官被仰付、難有仕合奉存候、右御礼申上度、以愚札如斯御座候、恐惶謹言

九月廿一日

池田岩之丞

書判

御吟味役衆不殘 格通

一筆啓上仕候、然は今般私儀、父仙九郎跡式被下置、父老年迄數年出情相勤候ニ付、別段之訳を以、御代官被仰付、難有仕合奉存候、右御礼可得貴意、如此御座候、恐惶謹言

九月廿一日

池田岩之丞書判

御組頭衆不殘

「御殿詰」(朱書)

「下」(朱書)

(朱書)

「右同文言御同役方不殘」

〔御勘定奉行衆

翻刻「縣令雜書」(藤村)

御代官

池田岩之丞

右は、来ル十一日誓詞被仰付候得は、病氣差合名改等無之罷出候哉否、明朝拙者方正御申聞可有之候、以上

十一月六日

羽太庄左衛門

(朱書)

「右之通達有之候ニ付、差合改名無之旨、御殿ニ直ニ御答被成候旨、吉岡榮之助殿御出被申聞相濟申候」

午十一月廿四日越前守殿、啓阿弥を以渡

御勘定奉行正

御勘定組頭

都筑金三郎

御代官

池田岩之丞

右、明廿五日之朝、評定所立罷出、誓詞仕候様可被申渡候

十一月廿四日

(朱書)

「右御書付を以、土方出雲守殿被仰渡、立会村并榮之進殿」

起請文前書

一 今度御代官役就被 仰付候諸事入念重

公儀 御為第一奉存、聊以 御後閣儀仕間敷候事

一 御一門方を始諸大名、諸傍輩と奉対

御為以惡心申掛候族有之候は、早速御勘定奉行中迄可申達候、勿論一味同心仕間敷候事

一 御代官所御仕置之義、及心之程情を入、私欲不仕、萬事 御為能樣可仕候、以来何方ニ而御代官所被仰付候共、同事相心得可申候、惣而金銀米錢何ニ而も納拂之義、無油断可成程入念、物毎無最眞偏頗、正路可仕候事

附、御代官所之内、金銀銅鉄鉛山并野山海川御運

上場出来仕候ハ、同前相心得可申候事

一 御代官所毎年檢見入念、御取箇之儀、及心之程遂詮義、萬事 御為能樣仕、又百姓も不困窮樣可申付候、并堤川除御普請其外御作事御賄等御入用之義ニ付、随分吟

味可仕候、御代官所之義は不及申、惣而被

仰付候御役儀ニ付、金銀米錢衣類諸道具其外何ニ而も、一切受用仕間敷候、勿論手代之儀、随分慥成者、筋目等遂吟味召抱可申候、尤百姓町人等も金銀米錢衣類諸道具其外如何様之輕き品ニ而も、一切受用不仕、賄賂等堅請申間敷旨、誓詞可申付候、并召仕之者ニ至迄、右同断可申付候事

附、上納可仕金銀米錢、無油断取立之、少も無遲滯相納可申候、若御用之儀ニ付手前ニ預り置候共、取散申間敷候事

一 何方ニ而も、檢地仕候ハ、御条目之通相守、無依怙最眞正路可仕候事

一 御用之儀、不依何事、相談之時、存寄之通、不殘心庭申出、其上 御為能方多分ニ付可申候事

一 跡々被 仰出候御条目之趣、違背仕間敷候、御代官所町人百姓並も、無油断可申付候、自今以後、被 仰出候御条目有之候ハ、同事相守可申候事

附、公事訴詔有之時、双方之申分随分入念、及心

之程致詮議、無依怙最眞、有牀可申付候事

一不限御料私領、何方ニ而も、論所検使等ニ被遣候ハ、依怙最眞不仕、明細見分之上、有牀可申上候事

一以御威光、私之著不在、対町人百姓、非儀申掛間數候事

附、手代并召仕之者共、常々相悞、私曲不法不仕候様、堅誓詞申付、若相背候もの有之候ハ、急度遂詮議、可申付候事

右条々雖為一事於致違犯者

梵天帝釋四大天王總日本國中六十餘州大小「神祇殊伊豆箱根兩所權現三鳥大明神」八幡大菩薩天満大自在天神部類眷」屬神罰冥各可罷蒙者也仍起請如件

天保五年十一月 池田岩之丞

居判

松 平周防守殿

初鹿野河内守殿

(朱書)

「右年十一月廿五日正七ツ時出宅、評定所江罷出、都筑金三郎

翻刻「縣令雜書」(藤村)

江打合、本紙并美濃紙写老通相添、留役石川新吉差出候処、組頭中野又兵衛差出候段、申聞扣罷在、且御出座出席宛は新吉認入

御出座

御礼廻り

松 平周防守殿

松平周防守殿

大目付出席

奉行衆不殘

初鹿野河内守殿

御殿中之間組頭

差添

中野又兵衛

内 藤隼人正殿

都筑金三郎

御老中大目付計肩書認

誓詞被

御代官

仰付候御礼

池田岩之丞

本紙程村

写 老通

老冊 美濃紙 罰文なし

一右本紙認方は、表御右筆方江内々相頼、牛王紙等ニ而、都而金百足ニ而相濟

取調

一御親類書下書「老冊」差出候処、御目付方御突合清書迄、是

又前同断、金百足差出、御頼被成候事

一分限高四半短冊沓枚、中之間掛り沢太次郎殿に差出ス、

御殿に八枚差出ス

一明細書、美濃紙四半帳 御殿神尾利三郎殿御請取之事

一印鑑八枚、御見習之節、差出候得共、猶御役成ニ付、八枚

差出候事

但、御蔵、御金蔵、御貸附、伝馬町二、ノ五枚ニ下三

申五月廿四日

加賀守殿 留濟 啓阿弥

御勘定奉行

御代官

西村貞太郎

池田岩之丞

右明廿七日四時

御城に罷出候様被申渡候

五月廿六日

貞太郎名代兼

池田岩之丞

(朱書)

「右明榮飛驒守殿被仰渡

差引村井栄之進」

御用之儀、御座候間、明廿七日五ッ半時

御城に可罷出旨被仰渡、奉承知候、依之為御請申上候、
以上

五月廿六日

池田岩之丞

西村貞太郎

名代

池田岩之丞

明 飛驒守様

(朱書)

「右被仰渡ニ付、帰宅即刻、西村貞太郎は被仰渡書写相添、文
通を以申遣、勿論御勘定所ニ而、同人出役も有之候間、沓ト通
ハ出役之ものにも申聞遣候事 出役長谷川脇藏」

来子五拾歳、乗物御断并男子有無之儀、申上候書

付

来子年五拾歳相成候ハ、乗物御断并男子無之候ハ、
繫御届差出、且手附之内御譜代之者、来子年五拾歳ニ
相成、男子無之もの繫御届共差出可申旨、被仰渡承知
仕候、私儀、寛政八申年五拾歳罷成候ニ付、前年未年
十二月乗物断仕、并男子御座候、私并手附御譜代之
の之内、来未年五拾歳ニ相成、男子無之もの無御座候、
依之此段申上候、以上

亥十二月

池田仙九郎印

(朱書) 「見合ニ左ニ記し置」

乗物断

池田仙九郎

(朱書) 「小奉書裏白ミノ折掛

御殿中之間ニ差出ス」

一筆致啓上候、然は拙者儀、来申年五拾歳罷成候、右
之段日本之神偽ニ無御座候、依之乗物御断申上候、恐

翻刻「縣令雜書」(藤村)

惶謹言

寛政十一未年十二月 御代官

池田仙九郎
居判

矢 部 彦 五 郎 殿
横 田 十 郎 兵 衛 殿
小 長 谷 和 泉 守 殿
新 見 長 門 守 殿
峰 屋 源 八 郎 殿
松 平 田 宮 殿
羽 太 庄 左 衛 門 殿
佐 久 間 左 京 殿
渡 辺 久 藏 殿
大 草 次 郎 殿

来年始二日御礼、各様御出之積候間
献上物等之儀、前々之通御心得、被仰合候様可被成候、
廻状来ル十六日迄ニ
御殿ニ御返可被成候以上

(朱書)「文化七千年」

十二月十四日

水野藤九郎

坂野喜六郎

池田仙九郎様

榊原小兵衛様

羽倉左 門様

追篇 御流御出之積、御心得可被成候

来正月年始御礼之儀ニ付、申上候書付

私儀、来正月年始

御礼二日ニ可罷出旨、并御流頂戴罷出可申段、御廻状

ヲ以、御達之趣承知仕候、依之申上候、以上

十二月

池田仙九郎

(朱書)「粘入半切美濃折掛

御殿中之間」出ス」

類焼御届書

私拝領屋敷、麻布市兵衛町貳百八拾五坪之場所、昨十

一日四ッ谷辺ヲ出火ニ而、同夜六ッ半時頃類焼仕候、依之此段御届申上候、以上

二月十二日

池田仙九郎

(朱書)「粘入半切美濃折掛

御殿中之間」老通

下御取箇方」老通」

借地住居之儀、奉願候書付

新御番

松平信濃守組

高六百石

松波又八郎

拝領屋敷表式番町法眼坂上

屋敷坪數六百五拾坪之内

三百坪 借地

右は、私拝領屋敷、麻布市兵衛町中ノ町、去月十一日、市ヶ谷、谷町辺ヲ出火ニ而、門長屋家作不殘類焼仕候ニ付、由緒も御座候間、右又八郎屋敷之内借地住居仕度旨、同人方」及掛合候処、差支之儀無御座候間、書

面之通、当分借地住居、諸御用向取扱候様仕度奉存候、依之此段奉願候、以上

未閏二月

池田仙九郎

未閏二月廿六日 池田仙九郎手代

高橋長兵衛印

(朱書)「右諸入用方ニ而、丹羽曾太郎様被仰渡」

御用達場并手代書役差置候小屋、類焼仕候ニ付、

申上候書付

借地引移之儀、御届書

私拝領屋敷類焼仕候ニ付、表式番町法眼坂上新御番、

去月十一日、市ヶ谷、谷町辺之出火ニ而、御用達場

并手代書役差置候小屋、不殘類焼仕候ニ付、右普請料

拝借仕度奉願候、依之申上候、以上

未閏二月

池田仙九郎

御勘定所

未三月十一日

池田仙九郎

御勘定所

覚

類焼拝借

一金六拾兩

但 来申之通五ヶ年賦
返納之積

右は御用達場并手代差置候小屋普請料、願之通拝借被仰付候旨、被仰渡、承知奉畏候、罷帰早速仙九郎江可申聞候、右為御請申上候、以上

屋鋪三方相对替、奉願候覚

松波久八郎拝領屋敷

表式番町法眼坂上

御代官

御殿御勝手 御取固 御領 御勝手御月番江
中之間 中之間 公事方 卷通ツ、宛所なし

(朱書)
「大半紙」

坪数六百五拾坪 池田仙九郎江

平井熊藏拝領屋敷 新御番

小石川馬場近所築地 松平信濃守組

坪数五百坪 松波久八郎江

池田仙九郎拝領屋敷 小普請組

麻布市兵衛町中ノ町 石川左近將監支配

坪数貳百八拾坪余 平井熊藏江

右私拝領屋敷之儀は、養祖父池田先喜八郎、御代官勤役

之節、年号月日不相知、麻布鳥居坂上ニ町、坪数三百七

拾坪拝領仕、其後養父喜八郎、御勘定奉行支配無役之節、

右鳥坂上拝領屋敷、安永五申年三月十八日、京極寺岐守

小普請組岡野外記支配、山村清三郎拝領屋敷と三方相对

替奉願候処、同年七月十六日、願之通相对替被 仰付候

旨、田沼主殿頭殿被 仰渡、其後相对替不仕候

右之通三方相对替仕度、此度奉願候、以上

未四月 (朱書) 池田仙九郎

(朱書) 「御老中計肩書入ル

「三寸五分」 御代官」

屋敷三方相对替 中村八太夫

願之通被 仰付候 名代

「御礼 池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切無印ミノ折掛

御礼廻り被仰渡候御老中

御勘定奉行不殘」

下野守殿 林阿弥ヲ以

御勘定奉行江

平井熊藏拝領屋敷 新御番

小石川馬場 松平信濃守組

五百坪 松波久八郎江

松波久八郎拝領屋敷

表式番町 御代官

六百五拾坪 池田仙九郎江

池田仙九郎拝領屋敷 小普請組

麻布市兵衛町 石川左近將監支配

貳百八拾坪余 平井熊藏江

右願之通、屋敷相对替被 仰付候、御普請奉行可被談

候

(朱書)

「右七月十八日、下野殿被仰渡候段、小笠原伊勢守殿被仰渡、御立会坂野喜六郎殿之事」

(朱書)

(朱書)

「肩書御老中斗

「長三寸五分」

(朱書)

屋敷三方相對替

「御代官」

願之通被 仰渡候

池田仙九郎

御禮

(朱書)

「着服 麻上下」

「中川4」

(朱書)

「御老中

御月番 土 井大炊頭殿

被仰渡候 青 山下野守殿

御勘定奉行

柳 生主膳正殿

小笠原伊勢守殿

肥 田豊後守殿

有 田播磨守殿

翻刻「縣令雜書」(藤村)

御殿詰

坂 野喜六郎殿

水 野藤九郎殿」

屋敷相對替、請取渡相濟候趣、御届書

覚

松波久八郎拝領屋敷

表式番町法眼坂上

御代官

坪數六百五拾坪

池田仙九郎江

池田仙九郎拝領屋敷

小普請

麻布市兵衛町中ノ町 石川左近將監支配

坪數壹百八拾坪余

平井熊藏立

右は、先達而私井松波久八郎、平井熊藏、三方相對替

奉願候処、願之通被仰付候ニ付、今六日、書面之通請

取渡相濟申候、依之此段御届申上候、以上

未八月六日 池田仙九郎

(朱書)

「のり入半切無印

ミの紙折掛」

検見御暇願書

之義奉願候、以上

(朱書)

申八月「五日出」

池田仙 九郎

山本大 膳

田口五郎左衛門

佐藤忠左衛門

野田斧 吉

大貫次右衛門

(朱書)

「右は山本大膳殿方ニ而御取調

御同人御差出之事

」

出羽国御代官

池田仙 九郎

武蔵

上野国御代官

信濃

山本大 膳

出羽国御代官

田口五郎左衛門

上野

下野国御代官

陸奥

佐藤忠左衛門

越後国御代官

野田斧 吉

右同断

大貫次右衛門

右者、私共御代官所、当分御預所、当秋田方為検見、

当月下旬迄、出立、罷越候様仕度奉存候、依之御暇

右京太夫殿

林阿弥

御勘定奉行

下ケ札

池田仙 九郎

五人名代兼

山本大 膳

野田斧吉

田口五郎左衛門

佐藤忠左衛門

野田斧 吉

△

大貫次右衛門

右明十日四ッ時

御城立罷出候様可被申渡候

八月九日

(朱書)

「右は、村垣淡路守殿被仰渡、御立会中川忠五郎殿之由、野田
斧吉殿を拝借写取、御請御同人を御差出、相濟候旨、被仰渡
候事」

御請

御用之儀御座候間、明十日五ッ半時

御城立罷出候様、被仰渡、承知奉畏候、右為御請申

上候、以上

八月

大貫次右衛門

佐藤忠右衛門

田口五郎左衛門

山本大膳

池田仙九郎

右五人名代兼

野口斧吉

村淡路守様

支配所立為檢見罷越候儀ニ付、申上候書付

私御代官所、当分御預所、出羽、陸奥国村々当田方檢
見為御用、当月中旬頃出立仕候ニ付、御暇拝領物之儀、
此節可奉願候處、足痛ニ而歩行は可成ニ出来仕候得共、
御暇拝領物被仰付候節、御座敷内立居着座等、難儀仕
候間、平愈仕候迄見合候而は、檢見旬相後、支配所之
儀は、霜雪早き場所故、稲草相痛村々難儀仕候間、可
相成儀ニ御座候ハ、御暇拝領物之儀、不奉願、出立
御届申上候迄ニ而出立仕度奉存候、依之此段奉伺候、
以上

(朱書)

卯八月「三日」

池田仙九郎

(朱書)

「御殿中之間立差出

八月八日御下知済

粘入半切

美濃折掛

「粘入半切

美濃折掛」

村井栄之進

中嶋平四郎

貴様御支配所、当田方検見為御用、御出立之處、御足痛ニ付、御暇御拝領物御願不被成、御出立之儀、御伺有之候処、被御申立候通、松和泉守殿被仰渡候段、飛驒守殿被仰聞候間、此段御達申候事

辰九月

御請

私儀足痛ニ而着座難相成候間、御暇御拝領物無之、検見出立仕度旨、願之通、松和泉守殿被仰渡候段、承知奉畏候、右為御請申上候、以上

九月

池田仙九郎

(朱書)

金三枚
時服二

池田仙九郎

支配所村々取扱方出情仕、数年無懈怠骨折相勤候ニ付、拝領物被 仰付之

天保二卯十二月

(朱書) 「林肥後守侍座」

(朱書)

「右 御右筆部屋縁煩、卯十二月五日水 出羽守殿被仰渡、御名代ニ付、西丸御謁は無之候事、曾我豊後守殿御差添」

支配所村々取扱方 池田仙九郎

出情仕数年無懈怠 名代

骨折相勤候ニ付拝領物 池田岩之丞

被 仰付候御礼

(朱書)

「兩御丸御老若不殘、奉行衆不殘、吟味役衆不殘、組頭衆不殘」

父仙九郎儀

拝領物被

仰付候御礼

池田岩之丞

(朱書)

「右同断」

御代官

支配所場所替

壱万石増地

西村貞太郎

池田岩之丞

右被仰付候旨、於御右筆部屋縁類、加賀守殿申渡、林

肥後守殿侍座

差添

明楽飛彈守

(朱書)

天保七申五月廿七日「御老若計ニ書認

其外不認

支配所場所替 御代官

壱万石増地被 池田岩之丞

仰付候御礼

川勝亀之丞同居之義、奉願候書付

西丸御小性組

菅谷山城守組

進物番出役

川勝亀之丞

右、私兄亀之丞儀、拝領屋敷家作出來迄、御大番頭新庄主殿頭組尾崎金之丞方ニ、同居罷在候処、家作大破相成候ニ付、出來迄、私方ニ同居為仕候様仕度奉存候、依之此段奉願候、以上

(朱書)

申六月「粘入半切

池田岩之丞

ミノ折掛」

池田岩之丞様

村井榮之進

以半紙致啓上候、然ハ御小性組番頭菅谷山城守組川勝亀之丞儀、貴様ニ同居之義、御願之通飛驒守殿御聞届相済候間、此段御達申候、以上

六月廿七日

申渡

戊八月廿日

池田岩之丞

和泉守殿

林阿弥

名代

御勘定奉行^五

篠本彦次郎

御代官

池田岩之丞△

右、明廿一日四ッ時

名代

御城立名代可被差出候

篠本彦次郎

(朱書)

八月廿日

「右隼人正殿申渡」

(朱書)

相沢嘉之吉

出役大矢周助

「右於御右筆部屋縁類、御老中越前守殿被仰渡候

立会御目付加藤靱負殿

(朱書)

「御禮廻り 長三寸五分 肩書御老若計」

横卷寸五分

八月廿日

池田岩之丞名代

篠本彦次郎

内 隼人正様

去西大塩平八郎頭取 御代官

大坂表乱妨之節早速罷出 池田岩之丞

骨折候段御沙汰之趣被 名代

仰渡候御札

篠本彦次郎

(朱書)

「兩御丸

御老若方 御勘定奉行衆 同吟味役衆 立会御目付衆

御組頭衆 評定所組頭

御殿詰

(朱書)

吟味役衆 「様 片苗字 格通」

(朱書)

御殿詰組頭衆不残「格通」

(朱書)


下組頭衆不残 「格通」

一筆啓上仕候、然ハ私儀、去酉年大坂町奉行跡部山城


守組与力大塩格之助養父大塩平八郎頭取、徒党之もの


共、大坂市中放火及乱妨候節、建國寺 御宮消防之儀、

并天満橋相固骨折候儀、一段之事ニ付、御沙汰之旨被

仰渡、難有仕合奉存候、右御札「△」申上度、

(朱書)「捧愚札候、恐惶謹言

(朱書)「△」以愚札如此御座候

(朱書)「△」可得貴意如此御座候」

「天保八酉」

九月朔日

(朱書)

池田岩之丞 居判

御頭方不残「様 片苗字 格通」

池田岩之丞儀、惣御寄合罷出不申儀ニ付、申上
候書付

今廿三日、深谷遠江守様於御宅、惣御寄合御座候間、

岩之丞儀も可罷出旨、御廻状之趣、拝見仕候、當時大

坂表ニ罷在候間、此段留守居之もの、書付ヲ以申上候、

以上

戊

池田岩之丞元ノ手附

十月廿三日

太田原慎蔵印

伊勢参宮之儀、奉願候書付

私儀、此度大坂々駿府陣屋立罷越候ニ付、道筋最寄ニ

も御座候間、伊勢参宮仕度奉存候、依之此段奉願候、
以上

子八月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛

御殿中ノ間」

村井榮之進

中嶋平四郎

岩之丞殿、伊勢参宮御願之義、奉行衆被仰上ニ相成
候処、願之通可申渡旨、水越前守殿被仰渡候間、其段
早々彼地申可申遣候

子八月九日

一筆啓上仕候、然ハ私儀、伊勢参宮之儀、願之通リ被
仰渡、無滞参宮仕、難有仕合奉存候、右御禮為可申上、
捧愚札候、恐惶謹言

九月七日

池田岩之丞居判

内 隼人正様

明 飛驒守様

深 遠江守様

佐 長門守様

一筆啓上仕候、然ハ私儀、伊勢参宮之儀、願之通被仰
渡、参宮仕、難有仕合奉存候、尤奉行衆ハ書狀を以
申上候間、宜被仰上可被下候、恐惶謹言

九月七日

池田岩之丞居判

村井榮之進様

中嶋平四郎様

松平鋺之助、私拝領屋敷江差置候儀ニ
付、奉願候書付

小普請組

坪内左京支配

松平鋺之助

右私甥飯之助儀、拝領屋敷は地守附置、小普請組戸塚備前守支配鈴木左膳方ニ同居仕罷在候処、此度家作修復中手狭ニ付、同居難相成候間、私拝領屋敷六百五拾坪之内、百坪之場所、明家作御座候間、当分之内、賃遣、住宅為仕度奉存候、依之此段奉願候、以上

子十二月

池田岩之丞

(朱書)

〔御殿中之間〕

池田岩之丞殿

元ノ手代

中半四郎

岩之丞殿御拝領屋敷之内、坪内左京支配松平飯之助御貸地之儀、御願之通土佐守殿御聞届相済候間、此段申達候、以上

壬正月廿三日

池田岩之丞拝領屋敷之内、坪井左京殿支配松平飯之助借地願之義、願之通御聞届相済候段、被仰渡承知奉畏候、早速岩之丞申聞候様可仕候、此段為御請申上候、

以上

丑壬正月廿四日

池田岩之丞手附

川村左五郎印

(朱書)

〔御殿〕

和田庄兵衛殿御請取相成候事

私拝領屋敷之内借地差返候御届書

小普請組

近藤織部支配

松平飯之助

右私甥松平飯之助拝領屋敷家作普請出来候迄、私拝領屋敷之内、百坪借地住宅之義、去ル子年中願之上、私拝領屋敷内ニ住宅罷在候処、此度飯之助拝領屋敷家作普請出来仕候ニ付、昨四日引移り申候、依之此段御届申上候、以上

卯十月

池田岩之丞印

(朱書)

〔粘入半切美濃折掛

御出掛り福田勝平殿相願、後藤一兵衛殿御差出」

(朱書)
〔御殿〕

来卯春、学問御吟味請候もの無之義、申上候書
付

書役見習申付候御届書

来卯春中、於学問所御吟味有之、諸事前々之趣相心得、

高木作右衛門元手代

学問心掛々候もの罷出候様、御達之趣承知仕候、然ル

佐藤柔助養子

処、私并俸手附之もの、御吟味請候もの無御座候、依

佐藤官吾

之此段申上候、以上

寅五月

池田岩之丞印

右之もの儀、筆算達者ニ仕、貞実成ものニ付、去卯九
月中々、私役所書役見習ニ申付置候、依之此段御届申
上候、以上

御勘定所

辰九月

池田岩之丞

御勘定所

屋敷内、鉄炮角場無之趣、申上候書付

屋敷内、鉄炮角場願濟ニ取立有之候へ、願濟年

月日并當時稽古致し候有無共、可申上旨、御達之趣承

書役抱入伺書

高木作右衛門元手代

知仕候、私拝領屋敷内、右之義無御座候、依之此段申

佐藤柔助養子

上候、以上

佐藤官吾

当言辰二十三才

寅九月

池田岩之丞印

湯嶋天神門前町

御勘定所

家持

町請人 慶次郎

川村左五郎印

右柔助儀、作右衛門役所相勤罷在候處、多病ニ而永之暇相願、天保六未年中同人伺之上、暇ニ相成申候、然ル處、右官吾儀、去卯九月中、私役所書役見習申付、其段御届申上置候處、出情相勤候ニ付、此度書役ニ抱入申度、作右衛門方_ニ及掛合候處、故障之儀、無之旨、返書差越申候、尤支配所内、親類縁者無御座候、依之返書相添、此段奉伺候、以上

天保十五辰年八月 池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

(朱書)

「八寸通物

」於差出方

差出方」

竹内清太郎殿_ニ被仰渡

差引

田中庄次郎殿_ニ請書出ス」

(朱書)

「右伺之通御下知相濟候段被仰渡、承知奉畏候、御代官_ニ可申聞候、右為御請申上候、以上

辰九月廿四日 池田岩之丞手附

翻刻「縣令雜書」(藤村)

以剪纸致啓上候、然ハ貴様元御手代佐藤柔助養子官吾儀、拙者役所為見習置候處、出情相勤候ニ付、此度書役抱入之儀、相伺候積御座候、御故障之義ハ無之候哉否、御報被仰聞候様いたし度奉存候、右之段可得御意、如此御座候、以上

辰六月五日

池田岩之丞印

高木作右衛門様

御剪纸致拝見候、然ハ拙者元手代佐藤柔助養子官吾儀、貴様御役所為御見習置候處、出情相勤候ニ付、此度御書役御抱入之儀、被成御伺候積御座候間、故障之儀ハ無之候哉否、可及御報旨、御紙面之趣致承知候、当方故障之筋、無御座候間、被成御伺候様奉存候、右貴客可得御意、如斯御座候、以上

七月廿五日

高木作右衛門印

池田岩之丞様

手代抱入伺書

伊奈半左衛門元手代

奈古鑄市

当巳二十八才

牛込御納戸町

家持

町請人 芳藏

右鑄市儀、伊奈半左衛門元手代相勤罷在候處、病氣ニ付、暇相願、同人伺之上、天保十亥年五月中暇相成、然ル處、此節病氣全快仕候ニ付、私手代ニ抱入申度、鑄市勤中故障有無、半左衛門正及掛合候處、故障無之段、返書差越申候、尤支配所内、親類縁者無御座候、依之右返書相添、此段奉伺候、以上

弘化二巳年正月

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「右伺之通、御下知相濟候段、被仰渡、承知奉畏候、御代官ニ可申聞候、依之御請申上候、以上

於差出方御下知相濟候段

竹内清太郎殿

差引

石川新助殿

以剪紙致啓上候、然ハ貴様元御手代奈古鑄市儀、病氣ニ付暇相願、御伺之上、天保十亥年五月中、暇相成候處、此節病氣全快いたし候ニ付、拙者手代ニ抱入之儀、相伺候積御座候、同人勤中、御故障之儀は無之候哉否、御報被仰聞候様いたし度奉存候、右之段可得御意、如斯御座候、以上

八月廿日

池田岩之丞印

伊奈半左衛門様

御剪紙致拜見候、然ハ父半左衛門元手代奈古鑄市儀病氣ニ付、天保十亥年五月中、伺之上暇差遣候處、此節病氣全快いたし候ニ付、貴様御手代ニ御抱入御伺被成候積ニ付、鑄市勤中故障有無、御問合之趣、致承知候、

半左衛門役所勤中、故障之義無之候、右御報可得御意、
如斯御座候、以上

正月十九日

伊奈半十郎印

池田岩之丞様

手代改姓御届

覚

私手代

木佐森姓改

須川良助

右、木佐森良助儀、書之通改姓仕度旨相願、故障無御
座候ニ付、承届申候、依之御届申上候、以上

未五月

池田仙九郎印

御勘定所

元手代抱戻之儀伺書

覚

私元手代

田村敬藏

下谷広小路

家持

町請 権十郎

右之者、文化十四丑年中、伺之上書役ニ抱入、文政元
寅年手代ニ取立、羽州柴橋陣屋詰申付置、実体相勤罷
在候処、近年病身ニ相成、御奉公難相勤段申立、暇相
願、当三月中、伺之上、暇差遣、出府後、於御当地療
養仕候処、此節全快相成、尚又再勤仕度段相願、私ニ
おゐても、年来召仕候もの之儀ニ付、抱戻候様仕度奉
存候、依之此段、奉伺候、以上

文政九戌年八月 池田仙九郎印

御勘定所

(朱書)

「右伺之通御下知相濟候段

於御取箇差出方石井源左衛門殿被仰渡

御立会大竹庄九郎殿立請書出ス

」

元手代久保寺清七悴、着類被盜候儀ニ付、御
届書

覚

一 浅留藍立縞、裏花色、木綿布子 沓ッ

一 木綿、茶立縞胴着、裏花色木綿 沓ッ

一 太織萌黄立縞胴着、裏萌黄絹縫々 沓ッ

一 木綿浅黄中形襦袢、袖口中形絹 沓ッ

一 小柳残黄縞男帶 沓ッ

但、大小は番人正預置候ニ付、被盜不申候

右は亡父仙九郎元手代久保寺清七悴富次郎儀、本所横
網町正用事有之、罷越候途中、同所湯屋林屋甚兵衛方
ニ而、入湯いたし候処、右衣類不相見候ニ付、湯番人
正申聞、相尋候へ共相知不申、全着逃ニ逢、被盜候旨、
清七も届出候間、此段御届申上候、尤町触之義は相願
不申候、以上

(朱書)

「天保六」

未二月

池田岩之丞

(朱書)

「御殿吉岡榮之助殿正差出

宿所書付別紙ニ而出ル」

以手紙致啓上候、然は拙者拝領屋敷内、手代共差置候
処、普請中手狭ニ付、貴様御地面之内、当分借地手代
永山半助差置候様いたし度、御差支無之候ハ、其御
頭正御掛合之上、願書其筋正差出候様可致否、御報ニ
御申聞有之候様いたし度存し候、右可得御意、如此御
座候、以上

辰十二月

池田岩之丞

西川誠一様

以手紙致啓上候、然は拙者拝領屋敷内、手代共差置候
処、普請中手狭ニ付、其御組与力西川誠一地面之内借
地、手代差置候様いたし度段、同人正及掛合候処、差
支無之旨、返書差越申候、誠一も可願出候間、御差
支無之候ハ、願書其筋正差出候様可被候否、御報ニ

承知いたし度奉存候、右可得御意、如此御座候、以上

辰十二月

池田岩之丞

逸見甲斐守様

御用人中様

借地奉願候書付

私拝領屋敷内、手代共差置候処、普請中手狭ニ付、御書院番頭逸見甲斐守組与力西川誠一、由緒も有之候ニ付、同人地面之内、当分借地いたし、手代共差置候様仕度奉存候、依之此段奉願候、以上

辰十二月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

御殿」

後藤一兵衛

岩之丞殿、御書院番逸見甲斐守殿組与力西川誠一地面之内、当分借地被致、手代被為置度旨、御願之通り河内守殿御聞届相濟候事

巳四月

御殿詰

組頭中

深谷遠江守

池田岩之丞手代

相沢時之進

宮部孫八郎

右は申渡儀有之候間、明二日朝五ツ時、自分立可罷出旨、可申達候

九月朔日

池田岩之丞殿

元ノ手代 村井栄之進

別紙之通り、遠江守殿も達有之候間、写寄通差遣申候、

承知之旨明朝

御殿立可申聞候以上

九月朔日

御請書

池田岩之丞手代

相沢時之進

宮部孫八郎

右は、被仰渡候御義御座候間、今二日五ッ時、深遠江
守様御宅立可罷出旨、被仰渡、承知奉畏候、依之此段
申上候、以上

池田岩之丞手附

戊九月朔日

太田原慎蔵印

(朱書)「翌二日御殿立差出ス」

御請書

水野正太夫、山崎次郎太郎、相沢時之進、宮部孫八郎
儀、大坂町奉行跡部山城守殿組与力大塩格之助養父大

塩平八郎、頭取徒党致し、大坂市中放火及乱妨候もの
共、於根本善左衛門役所、御評定所留役衆吟味被致候
節、骨折候ニ付、正太夫立銀式枚、次郎太郎、時之進、
孫八郎立同壹枚宛、被下置候

右松平和泉守殿被仰渡候旨、被仰渡、奉承知、難有仕合
奉存候、仍御請書如件

元根本善左衛門手附元メ

当時御普請役元メ進退

御普請役

天保九戌年九月二日 太河内清助印

右

善左衛門手附

山崎次郎太郎名代

同人手附

上原鉄次郎印

池田岩之丞手代

相沢時之進

宮部孫八郎

右両人名代

相沢嘉之吉印

御奉行所

(朱書)

「深谷遠江守殿於御宅御評席ニ被仰渡

差引

留役 白石十太夫殿

大坂乱妨一件ニ付 御留役衆 池田岩之丞手代
 「〇」^{〔朱書〕}「之節」^{〔朱書〕}
 於同所 吟味被致候節、骨折 相沢時之進
 候ニ付、御褒美銀頂戴仕、難有 宮部孫八郎
 仕合奉存候 御禮 名代
 (朱書) 「朱書之分白石十太夫殿」 相沢嘉之吉

(朱書)

「御禮廻之義、白石十太夫殿立承り候処、遠山左衛門尉殿、豊

田藤之進殿計ニ而宜旨を申聞、直ニ廻勤可致旨談之事

遠山左衛門尉殿 公事方

豊 田藤之進殿 留役組頭

白 石十太夫殿 留役

山 本新十郎殿

村 井栄之進殿 御殿組頭

翻刻「縣令雜書」(藤村)

池田岩之丞殿

深 遠江守
遠 左衛門尉

其方足輕

大橋六兵衛

富田藤 助

右は、於其表、徒党及乱妨候もの共吟味中、警固等之
義、骨折候ニ付、替置候様可被致候

右は松 和泉守殿被仰渡候間、申達候、以上

九月二日

遠 左衛門尉印

深 遠江 守印

池田岩之丞殿

(朱書)

「右九月二日深谷遠江守殿立老人呼出之上、御印状ヲ以御渡有
之、即日大坂立差立ル」

一筆啓上仕候、然は去西年、大坂町奉行跡部山城守組
与力大塩格之助養父大塩平八郎頭取徒党之もの共、大
坂市中放火及乱妨候一件、根本善左衛門於元役所、留
役衆吟味之節、私手代共差出候処、骨折候ニ付、御褒

美銀被下置、足輕兩人は普置候様被仰渡、難有仕合奉
存候 右御礼為可申上捧愚礼候、恐惶謹言

九月十二日

池田岩之丞

深 遠 江守様

居判

遠 左衛門尉様

式通

〔朱書〕「或」
一筆啓上仕候、然は去酉年、大坂町奉行跡部山城守組
与力大塩格之助義父大塩平八郎頭取徒党之もの共、大

坂市中放火及乱妨候一件、根本善左衛門〔朱書〕「御含味之節」於元役所〔〇〕留

役衆吟味之節、私手代共差出候処、骨折候ニ付、御褒

美銀被下置、足輕兩人は普置候様被仰渡、難有仕合奉

存候、右御禮可貴意、如此御座候、恐惶謹言

九月十二日

池田岩之丞

豊田藤之助様

居判

〔朱書〕「

白石十太夫様

山本新十郎様」

〔朱書〕

「右平岡熊太郎様在問合候処、御礼廻りは無之、奉行衆、公事
方、評定所組頭掛り、留役兩人在御礼状計りニ而済候由」

私手代森田八郎儀、紀州周參見浦難船為見分差遣候処、
駢と沈船之見居も無之趣を、乗組之もの共申旨ニ泥、
沈船と差極、事実相違之口書取之、出役場所引拂候始
末、不行届之至、既私、築山茂左衛門立会、吟味之上、
沈船ニ無之次第、相頭候段、出役之詮も無之、不束ニ
付、押込被仰付候旨、堀伊賀守申渡候間、此段御届申
上候、以上

亥十一月七日

池田岩之丞印

私手代森田八郎儀、紀州周參見浦難船為見分差遣候処、
口書不行届有之、出役之詮も無之、不束ニ付、押込被
仰付候間、差扣之儀、御勘奉行追伺書差出申候間、此
段御届申上、以上

亥十一月

池田岩之丞

勤方之儀、奉伺候書付

一私儀差扣奉伺候ニ付、御用向之義、從江戸御下知無

之内は、是迄之通相心得可申哉

一御用之儀ニ付 御城入仕候儀、如何可仕哉

右之通奉伺候、以上

亥十一月七日

池田岩之丞

御付札

「御用筋之儀支配ノ沙汰有之迄は、先其儘可被相勤候

(朱書)

「右三通、築山茂左衛門殿を以、井上河内守殿

正差出ス

用人 小浜新助

」

私手代森田八郎儀、紀州周参見浦難船為見分差遣候処、

暁と沈船之見合も無之趣を、乗組之もの共申旨ニ泥、

沈船と取極、事実相違之口書取之、出役場所引拂候始

末、不行届之至、既ニ私、茂左衛門立会吟味之上、右

は沈船ニ無之次第、相顕候段、出役之詮も無之、不束

ニ付、押込被仰付候段、堀伊賀守申渡、其段私ニ被相

達候、右科書写差上、此段御届申上候、以上

十一月七日

池田岩之丞印

(朱書) 「粘入半切美濃折掛、科書写同断」

森田八郎

右八郎儀、暁と沈船之見居も無之義を、乗組之もの共

申旨ニ泥、沈船と差極、事実相違之口書取之、出役場

所引拂候始末、不行届之至、既岩之丞、茂左衛門立会

吟味之上、右は沈船ニ無之次第、相顕候段、出役之詮

も無之、不束ニ付、押込申付ル

(朱書) 「十月七日堀伊賀守殿被仰渡

八郎鹿上下

差添

山本寛蔵」

差扣之義、奉伺候書付

私手代森田八郎儀、紀州周参見浦難船為見分差遣候処、

暁と沈船之見居も無之儀を、乗組之もの共申旨ニ泥ミ、

沈船と差極、事実相違之口書取之、出役場所引拂候始

末、不行届之至、既私、築山茂左衛門立会吟味之上、

右は沈船ニ無之次第、相顯候段、出役之詮も無之、不
束ニ付、押込被仰付候段、堀伊賀守が被相達奉恐入候、
依之差扣之義、奉伺候、以上

(朱書)

十一月七日「粘入半切無印」池田岩之丞

私手代森田八郎儀、紀州周參見浦難船為見分差遣候処、
稔と沈船之見居も無之儀を、乗組之もの共申旨ニ泥、
沈船と差極、事実相違之口書取之、出役場所引拂候始
末、不行届之至、既私、築山茂左衛門立会吟味之上、
右は沈船ニ無之次第、相顯候段、出役之詮も無之、不
束ニ付、押込被仰付候段、堀伊賀守申渡候、其段私に
被相達候、依之別紙差扣伺書差上候間、宜御取計可被
下候、右ニ付、御城代江茂左衛門を以御届申上、勤方
之義、相伺候処、御用筋之儀、支配が沙汰有之迄は、
先其儘相勤候様、伺書に御附紙を以被仰渡候間、奉行
衆に宜被仰上可被下候、奉願候、以上

十一月七日

池田岩之丞印

村井榮之進殿
中嶋平四郎殿

一筆啓上仕候、然は私手代森田八郎儀、紀州周參見浦
難船見分差遣候処、場所吟味不行届有之、押込被仰付
候ニ付、私儀、差扣之義、奉伺候処、差出ニ不及段、
被仰渡、難有仕合奉存候、右為御礼、捧愚札候、恐惶
謹言

池田岩之丞

十一月廿八日

花押

内 隼人 正様
明 飛驒 守様
深 遠江 守様
遠 左衛門尉様

一筆啓上仕候、然は私手代森田八郎儀、紀州周參見浦
難船見分差遣候処、場所吟味不行届有之、押込被仰付
候ニ付、私儀差扣之義奉伺候処、不及差出ニ段被仰渡、

難有奉存候、為御禮奉行衆立書狀差出申候、宜被仰上
可被下候、右之段、可得貴意、如斯御座候、恐惶謹言

十一月廿八日

池田岩之丞
花押

村井榮之進様

中嶋平四郎様

私手附安藤利八郎、跡目奉願候書付

覚

私手附

御普請役格

高三拾俵式人扶持

安藤利八郎

西五十九歳

養子

嶋田帶刀手附出役

安藤亀吉

西三十六歳

右亀吉儀、文化十四丑年山田仁右衛門役所見習被仰付、
文政五年年手附出役被仰付、同六未年仁右衛門御役替ニ

付、嶋田帶刀手附出役被仰付候

右利八郎儀、去申三月中、持病疝癰差発候處、追日
大病ニ罷成、此節差重り本復可仕駄無御座候間、若病
死仕候ハ、養子亀吉立跡式被下置候様仕度旨、奉願候
ニ付、病駄其外判元見届候處、相違無御座候間、利八
郎若病死仕候ハ、願之通、倅亀吉立跡式被下置候様
仕度、奉願候、依之願書、由緒書、其外諸書物相添、
此段申上候、以上

酉月日

池田仙九郎

手附之者、御切米、御扶持方、御証文奉願候書付

覚

山田仁右衛門明手附

元御普請役元ノ進退

池田仙九郎手附

高三拾俵式人扶持

安藤利八郎

右安藤利八郎儀、当夏御借米迄、山田仁右衛門手附ニ
而一紙請取、御扶持方は当十月分迄、御普請役元ノ進

退ニ而請取候処、当九月廿三日、私手附被仰付候間、御切米御扶持方御証文出候様奉願候、以上

未九月

池田仙九郎

(朱書)

「御殿中ノ間

粘入半切美濃折掛」

羽州幸生村銅山詰手附之儀伺書

覚

御中間頭鈴木宇右衛門組

御中間

高拾五俵式人扶持

山本太原次

当酉二十才

右は、私御代官所、羽州村山郡幸生村銅山詰之儀、寛政十二申年四月迄は、穿方大工之内、重立候もの、又は近村之事馴候もの共召抱、小役人と唱、御用方為取扱置候処、先前支配三河口太忠取扱中、不取締之儀も有之由ニ而、其節之小役人は暇差出、為代別段銅山方手附四人被仰付、銅山御用向引請相勤、何れも山元正

住居罷在候処、其後出銅出方も相劣候ニ付、文化五辰年、先川崎平左衛門伺之上、老入減、追々病氣ニ而相代り、当時竹内弥門二、久保伴助、佐藤善三郎共三人ニ而、銅山御用向引請、何れも山元住居相勤罷在候処、去ル丑年中、水拔普請成就いたし、同年より出銅多分ニ相成、穿方之もの共相増、出精相稼罷在候処、右様盛山ニ相成候儀ニ付、銅山詰手附三人ニ而は手廻不申、其上病氣差合等之節は、差支候儀ニ付、為取締重立候手代、銅山詰合御用向為取扱候処、去ル卯年中より病氣ニ而銅山引取、其後代之もの無之、其儘罷在候処、何れニも代之もの無之候而は、差支之儀ニ付、右代之もの取調候得共、一鉢極山中雪国之場所柄故、私手附又は同役共手附之内ニも、勤方相望候もの無之、仮令相望候共、銅山方之儀、心得候ものニ無御座候而は難相成、差支罷在候処、此節御中間方相勤候右山本太原次儀、銅山方手附之儀、相願候ニ付、得と相糺候処、兼而山方之儀、心掛罷在、筆算も達者ニ仕、殊ニ貞実ニ而、御奉公出情相勤罷在、御用立可申ものニ付、右

之もの、銅山手附被仰付候様仕度奉存候、右様被仰付候得は、是迄手附三人之内^ニ相加、以来四人^ニ而御用向為取扱候得は、手都合宜敷、御用方抄取可然儀、奉存候間、右太源次願之通、被仰付候様仕度奉存候、右伺之通被仰付候ハ、銅山御入用之内を以、並之通御手当相渡候様可仕候、右は場所柄故、外^ニ望之者も無御座候儀^ニ付、格別之御勘弁を以、太源次銅山手附被仰付被下置候様、仕度奉存候、依之由緒書相添、此段奉伺候、以上

文政八酉四月

池田仙九郎

(朱書)

〔粘入半切美濃折掛

本紙は四月十三日御直^ニ

御殿御勝手方御組頭衆^江御差出被成候〕

申渡

山本太源次

御自分儀、羽州幸生村銅山手附之儀、願之通、水出羽

翻刻「縣令雜書」(藤村)

守殿^江伺之上、被仰渡、銅出方相勤候内、沓ヶ年金拾五兩三人扶持被下候間、可得其意候

酉六月

(朱書)

〔御直、太源次^江可被仰渡分〕

銅出手附被仰付候御届書

山本太源次

右は、私御代官所羽州村山郡幸生村銅山手附之儀、願之通被仰付候間、姓名帳^江相加候様仕度奉存候、依之、此段御届申上候、以上

酉六月

池田仙九郎印

御勘定所

手附御切米御扶持方御証文之儀^ニ付、申

上候書付

御中間頭

鈴木宇右衛門組

私手附被仰付候

八九

高拾五俵式人扶持

山本太源次

右者山本太源次儀、是迄御中間相動罷在、御切米は、

当夏御借米迄、御扶持方は当六月分迄、御中間一紙手

形ニ而請取候処、私支配所羽州幸生村銅山手附被仰付

候ニ付、以来御切米、御扶持方書替所之御証文出候様

奉願候、以上

「文政八」(朱書)

西六月

池田仙九郎

(朱書)

「粘入半切美濃折掛

御殿中ノ間

」

申渡

池田仙九郎

名代

矢嶋藤藏

御中間頭鈴木宇右衛門組御中間山本太源次儀、其方支配所銅山方手附被仰付候ニ付、外手附並之通取来候御切米、御扶持方之外、勤候内、老々年金拾五兩三人扶

持、銅山万余金之内を以、御手当被下候間、得其意可被申渡候

右之趣、水 出羽守殿五伺之上、申渡候

西六月九日

(朱書)

「右、村垣淡路守殿被仰渡、御立会中村長十郎殿、御名代矢

嶋藤藏様ノ出役太田原慎蔵江被仰聞候、尤太源次御礼廻之

儀は、先格之通、慎蔵ノ同人立申聞候事

御勝手奉行衆式軒

但

御殿并下共組頭衆不殘

長崎掛り式人

太源次御礼廻り手札振合、但、御直廻りニ不及事

池田仙九郎手附

羽易幸生村銅山 銅山方

手附被仰付候御礼 山本太源太

手附出役之者奉願候書付

私手附

御普請役格

父持高

山崎勤吾倅

高拾五俵老人扶持

山崎茂三郎

当戊二十三才

六月晦日

池田仙九郎手附

高橋古助印

申渡

池田仙九郎手附

御普請役格

勤吾倅

山崎茂三郎

右茂三郎父山崎勤吾儀、文化元子年三月御小人持格を以、私手附被仰付、同十四年十二月御普請役格被仰付、当戊迄式十三ヶ年、無滯出情相勤、倅茂三郎儀も、私役所為見習置候処、実跡ニ而筆算達者ニ仕、可御用立ものニ御座候間、父持格を以、私手附出役被仰付候様、仕度奉存候、尤願之通り被仰渡候ハ、手当之儀は、私立被下候諸入用之内を以、相応ニ可差遣奉存候、依之此段奉願候、以上

「文政九」（朱書）

戊九月

池田仙九郎

「粘入半切ミノ折掛」（朱書）

右は仙九郎願之通、父持格を以同人手附当分出役被仰付旨、水 出羽守殿立伺之上、奉行衆被仰渡之
（朱書）
「戊七月二日於御勘定所

石井源左衛門殿被仰渡

御立会竹嶋勘左衛門殿

差引

佐藤五郎左衛門殿」

申渡

明後二日、手附山崎勤吾倅茂三郎儀、仙九郎召連可罷出旨被仰渡、承知奉畏候、此段仙九郎立可申聞候、以上

池田仙九郎

其方手附勤吾倅山崎茂三郎儀、願之通、手附当分出役申渡間、得其意、手当之義は、諸入用之内を以、相応可被相渡候

(朱書)「村垣溪路守殿被仰渡

石井源左衛門殿御立会」

手附之もの御暇、跡御抱入之儀、申上候書付

石原清左衛門

池田仙九郎

御抱替奉願書付

石原清左衛門手附

御普請役元ノ格

一高五拾俵三人扶持

高橋小太夫

内式拾俵 御足高

小太夫倅

池田仙九郎元ノ手附当分出役

高橋古 助

私儀、久々病氣罷在候処、追々差重、御奉公可相勤体無御座候間、御暇被下置、私取来候御切米、御足高、

御扶持方共、家内為扶助、仙九郎元ノ手附当分出役相勤候倅古助_ニ被下置、御抱入之上、私持格を以、引統仙九郎殿手附被仰付候様奉願候、以上

寅二月

高橋小太夫

前書之通、願書差出候ニ付、相糺候処、小太夫儀、久々病氣ニ罷在、御奉公可相勤体無御座候段相違無御座倅古助儀、篤実ニ御用立候儀は勿論ニ而、小太夫儀、兩親_ニ孝行を以、文化元子年六月御誉等被成下候もの之倅ニ付、父之志を請繼、是亦兩親_ニ孝養仕、且小太夫儀、当寅八十七才ニ相成、五拾七ヶ年無滞御奉公仕、既ニ五拾ヶ年以上無慥怠相勤候_ニ、文政七申年九月金五両被下置候儀ニ而、古助儀、当寅年_ニ迫武拾六ヶ年之内、元ノ役五ヶ年相勤、差働も有之、仙九郎役所之儀は勿論、支配所村_ニ取締氣請も宜敷、右様之もの御取立等被成下候ハ、手附手代一統之励ニも相成、父小太夫極老_ニ迫相勤候規模も相立可申奉存候間、格別之御評儀を以、御足高共被下置、御普請役元ノ格ニ而、仙

九郎手附被仰付候様、尤手当之儀は、仙九郎^五被下候諸入用之内を以、相応ニ相渡候様、被仰付可被下候、此段奉願候、以上

寅二月

石原清左衛門

池田仙九郎

御手附出役高橋古助^五申渡儀有之間、明十七日四ツ時、麻上下着用、御取箇掛^五御同道可被成候、尤病氣差合等候ハ、名代手附可被召連候、以上

三月十六日

竹内平之丞

池田仙九郎様

尚以右相濟候上、奉行衆被仰渡も御座候ニ付、是亦御心得可被成候、以上

申渡

石原清左衛門手附

高橋小太夫

名代

武井与左衛門

同人俣

池田仙九郎手附当分出役

高橋古助

小太夫病氣ニ付、願之通御被下、右明跡^五同人元高三拾俵三人扶持并御普請役格を以、古助儀、御抱入被仰付、仙九郎手附可相勤旨、奉行衆被仰渡之

(朱書)

「竹内平之丞殿申渡

御立会、杉浦市郎右衛門殿」

申渡

池田仙九郎

名代

池田岩之丞

其方手附当分出役高橋古助儀、父小太夫御暇明跡^五御抱入之上、願之通其方手附ニ申渡間、得其意、手当之儀は、諸入用之内を以、相応可被相渡候

三月十七日

(朱書)

「曾我豊後守殿被仰渡

差引

竹内平之丞

」

手附之者御借米、御扶持方御証文奉願候書付

覚

石原清左衛門手附

小太夫粹

一高三拾俵三人扶持

高橋古助

外高式拾俵 御足高之分除之

右小太夫儀、当三月十七日病氣ニ付、願之通、御暇出

候明跡立、元高三拾俵三人扶持ニ而、同月同日御抱入、

私手附ニ成候間、御借米は当春之分、御扶持方は当

三月分々相渡候様、御添状之儀奉願候、以上

三月

池田仙九郎

(朱書)

粘入半切

御殿中ノ間

ミノ折掛

高橋古助立申渡候儀有之候間、麻上下着用為致、明九日四時、御取箇差出方掛り立御召連可被成候、以上

八月八日

石井源左衛門

池田仙九郎様

(朱書)

「右役所請取書相渡候、即刻川村左五郎々高橋古助立及通達候事」

申渡

池田仙九郎手附元々

御普請役格

高橋古助

右は、年来出情相勤候ニ付、取来御宛行之ま、御普請役元々格被仰付旨、水出羽守殿立伺之上、奉行衆被仰渡之

(朱書) 「天保四巳年八月九日

於御取箇方

石井源左衛門殿申渡

差引

若田亀五郎殿

「御禮

(朱書) 「奉行衆四軒

吟味役衆五軒 御礼廻り

組頭衆 不残

仙九郎名代

井上十左衛門

御代官

池田仙九郎手附元メ

御普請役格

高橋古助

手附之者、拝借屋敷奉願候書付

野村彦右衛門

辻 富次郎

池田岩之丞

平岡彦兵衛

御代官

野村彦右衛門手附

御普請役格

山田一郎太

高式拾俵式人扶持

私儀、拝領屋敷無御座候ニ付、奉願候処、屋敷被下候

間、所は見立可相願旨、文政十三寅年十一月、水出羽

守殿被仰渡候

御代官

辻富次郎手附

御普請役格

右之もの、父母^江孝心を尽し候趣相聞、奇特之事ニ候、
普置候様可被致候

巳八月八日

出羽守殿御直

出雲守^江御渡

(朱書) 「土方出雲守殿被仰渡

差引

村井榮之進殿

巳八月九日於

御殿

名

「父母^江孝心を尽候段御替

被下年来出精相勤候ニ付

池田仙九郎手附

札

御普請役元メ格被仰付候

高橋古助

翻刻「縣令雜書」(藤村)

高式拾俵式人扶持

奈良丈 助

私儀、拝領屋敷無御座候ニ付、奉願候処、屋敷被下候間、所は見立可相願旨、天保三辰年壬十一月、松和泉守殿被仰渡候

御代官

池田岩之丞手附

御普請役元ノ格

高三拾俵三人扶持

高橋古 助

私儀、拝借屋敷無御座候ニ付、奉願候処、屋敷被下候間、所は見立可相願旨、文政十三寅年十一月、水出羽守殿被仰渡候

御代官

平岡熊太郎手附

御普請役元ノ格

高式拾俵式人扶持

奥野右源太

私儀、拝領屋敷無御座候ニ付、奉願候処、屋敷被下候間、所は見立可相願旨、天保二卯年十二月、松和泉守殿被仰渡候

右之通、私共追々願之通屋敷被下候間、所は見立可相

願旨、被仰渡御座候処、此度目白台、水戸殿下屋敷残地、当時稲垣対馬守当分御預地之内、相応之坪数被下置候様仕度、依之龜図絵図相添、此段奉願候、以上

未三月

山田一郎太

奈良丈 助

高橋古 助

奥野右源太

右之通奉願候間、屋敷被下置候様奉願候、以上

未三月

野村彦右衛門

辻 富次郎

池田岩之丞

平岡熊太郎

私手附中山並五郎住宅之儀ニ付、申上候書付

私手附中山並五郎儀、拝領屋敷四ツ谷表番衆町住宅罷在候処、此度陣屋詰ニ差遣候間、同人拝領屋敷地守附置、家作之儀、黒鉄之者中山金三郎組与頭飯田吉兵衛と申者、由緒も有之候ニ付、在勤中右之もの正預ケ置

申渡段、並五郎申立候間、金三郎方^ニ及掛合候処、

吉兵衛^ガも申出、相違之儀も無御座候旨、返書差越候

ニ付、同様承届^申候、依之此段御届申上候、以上

未四月

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「御殿中ノ間

大半紙通もの」

手附中山並五郎借地之内、首縊死人之義ニ付、

御届書

私手附中山並五郎儀、大坂谷町御役宅詰申付、出立仕

候処、四ッ谷番衆町^(義次)同人拝領屋敷之内、借地罷在候西

丸御広敷伊賀者岡田作十郎門内ニ、年齢五十才位、非

人躰之男、今晚首縊相果罷在候を、見廻り之もの見附

候旨、作十郎申聞、尤御届之義は、同人^ガ其筋^ニ申

立候旨、申聞候間、此段御届申上候、以上

申七月

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「右は御殿河井征太郎内慮伺候処、御談ニ而

一作十郎方^ガ頭^目御届差出可申事

一諸向御届之義は、御殿計ニ而、別段御奉行所、御勘定所

正は差出ニ不及事

一首縊死人、非人躰ニ付、御小人目付檢使之上、死骸は取

捨之事

尤町人躰ニ候ハ、御徒目付檢使晒之上、尋人無之候ハ

、寺院^ニ仮葬之事

一御当方^ニおゐてハ、御届之通、御殿^ニ差出、外構ひ之義

無之分、御同人御談之事

手附之もの借宅之儀ニ付、申上候書付

私手附当分出役太田原慎八儀、御書院番小笠原長門守

組間宮平次郎拝領屋敷之内、明長屋御座候ニ付、当分

借請住居仕度旨願出、平次郎方^ニ而も、差支無之、其

段長門守家来、掛合有之候ニ付、相違無之旨、返書差遣申候、依之此段申上候、以上

十一月

池田岩之丞印

(朱書) 御勘定所

〔御殿

中ノ間〕

掣養子奉願候覚

御代官

池田岩之丞手附

御普請役格

高式拾俵式人扶持

川村左五郎

内 拾五俵壹人半扶持 本高 寅四十八歳

五俵半扶持

御足高

美濃郡代

柴田善之丞手附

御普請役格

中村定吉弟

掣養子奉願候者無統 中村良 作

寅二十三歳

私儀、男子無御座候ニ付、右良作儀、統は無御座候得

共、娘と年齢も相応ニ御座候間、掣養子仕度奉願候、

右之外、同姓異姓、親類、遠類并統縁、同姓之内ニも、

掣養子可奉願、相応之もの無御座候間、右良作儀、掣

養子被仰付被下置候様奉願候、以上

印判

天保十三寅年十月

川村左五郎居判

池田岩之丞殿

(朱書) 〔程村堅物式通美濃折掛〕

(朱書)

〔折附〕

(朱書)

〔願書添差出〕

親類添願書

〔程村堅物式通美濃折掛〕

川村左五郎儀、男子無御座、娘御座候ニ付、柴田善之

丞殿手附、御普請役格中村定吉弟良作儀、統は無御座

候得共、此度掣養子奉願候、右之外、遠類并統遠同姓

異姓之内ニも、掣養子可相願者、無御座候間、右良作

儀掣養子被

仰付候様、私共儀も奉願候、以上

御代官

篠田藤四郎手附

天保十三寅年十月 内田良平印

池田岩之丞殿

私手附川村左五郎聶養子奉願候書付

私手附

御普請役格

高式拾俵式人扶持

川村左五郎

内 五俵

御足高

寅四十八歳

半扶持

御足扶持

柴田善之丞手附

御普請役格

中村定吉弟

聶養子奉願候者無統

中村良 作

寅二十三歳

右左五郎儀、男子無御座、娘御座候ニ付、統は無御座候得共、右良作儀、聶養子仕度旨奉願候、依之吟味仕候処、右之外、親類遠類統縁同姓異姓之内ニも、養子可仕相応之者無御座候間、左五郎願之通被 仰付被下候様、奉願候、依之願書、由緒書、親類書相添差上申

候、以上

(朱書)

寅十月「十日」

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切ミノ折掛 御殿中之間

和田庄兵衛殿御請取相成

願書一同由緒書

本紙 駿河半切折不付

美濃紙帖

沓通 但無判

御加筆済沓通添差出

親類書 ミノ通物 沓通

同 帳面 沓冊

卯二月廿七日

越前守殿

啓阿弥

御勘定奉行

留済

御出掛

御名代

篠本彦次郎

御代官

池田岩之丞手附

御普請役格

川村左五郎

美濃郡代

柴田善之丞手附

御普請役格

定吉弟

簀養子

中村良 作

右願之通簀養子相濟

(朱書)

「右二月廿七日於 御殿、備前守殿被仰渡

差引

中嶋平四郎殿

御禮廻り

奉行衆

御殿

組頭衆

吟味役衆

下

組頭衆

御掛方

願之通簀養子

池田岩之丞手附

被仰付候御礼

川村左五郎

(朱書) 「粘入半切美濃折掛」

手附出役之儀、奉願候書付

私手附

父持高

川村左五郎養子

高式拾俵式人扶持

川村良作

内 五俵

御足高 当卯二十四歳

半扶持

御足扶持

右良作養父左五郎儀、文化六巳年七月晦日、從部屋住、
私亡父仙九郎手附見習被仰付、同十一戌年五月十日、
父持格を以、同人手附当分出役被仰付、天保三辰年四
月八日、父左源太隠居被仰付、家督無相違被下置、御
普請役格仙九郎手附被仰付、同五年四月、仙九郎病
死ニ付、同五月四日御勘定所詰御普請役元ノ進退ニ罷
成、同六未年二月四日、私手附被仰付、当卯年迄三拾
五ヶ年、御奉公無滞相勤罷在候、然ル処、良作儀、去
寅年夏中ノ私役所爲見習置候処、筆算も相応仕、貞実
成ものニ而、往々御用立候ものニ御座候間、父持格を
以、私手附当分出役被仰付候様仕度奉存候、尤手当之

義は、私に被下置候諸入用之内を以、相渡候様可仕候、依之此段奉願候、以上

卯十一月

池田岩之丞

右者父元持格を以、池田岩之丞手附当分出役被仰付候旨、大炊頭殿に伺之上、奉行衆被仰渡之
(朱書)

「辰三月廿一日 御名代大熊善太郎殿

於差出方竹内清太郎殿被仰渡

差引

石川新助殿

池田岩之丞殿
元々手代
竹清太郎

左五郎倅

川村良作

申渡

池田岩之丞

名代

下ヶ札 大熊善太郎

右申達儀有之候間、麻上下着用、明廿一日五ッ半時、御取箇方に御代官名代同人被召連候様、可取計候、其後 御殿にも出勤被致候様、是又可取計候、以上

辰三月廿日

相渡候

(朱書)

「右同日 戸川播磨守殿被仰渡

於御殿 差引

竹内清太郎殿」

申渡

池田岩之丞手附

左五郎倅

川村良作

私弟旧離之義、申上候書付

私弟

山本良吉

当卯十七才

右は、平日身持不行跡ニ付、度々異見差加候へ共、相用不申候間、当三月中、親類坂部三五郎殿家来猪瀬兵助方^江異見差加^江呉候様願遣候途中^ハ欠落、何れ^江罷越候哉、所々相尋候得共、行衛相知不申、尤此上本心ニ可立戻見詰も無御座、行先ニ^ニ何様之儀、仕出候儀も難計奉存候間、親類一同相談之上、旧離仕度、此段奉願候、以上

卯七月

山本寛蔵

私手附之もの弟、旧離之儀ニ付、申上候書付

覚

私手附

高拾五俵式人扶持

山本寛蔵

右同人弟

山本良吉

当卯十七歳

右寛蔵弟良吉儀、身持不宜不行跡ものニ付、度々異見差加候得共、相用不申、当三月中、縁者之もの^江差遣候途中^ハ、何方^江相越候哉、不立帰候間、所々相尋候得共、行衛相知不申、此上立帰り、本心ニ可立戻見詰も無御座、行先ニ^ニ何様之儀、仕出候儀も難計ニ付、親類共一同相談之上、旧離仕度旨、寛蔵^ハ申聞候間、此段申上候、以上

(朱書)

卯七月「廿九日」

池田岩之丞

(朱書)

「右御出掛り無之故、和田庄兵衛殿^江差出候処、御請取相成

候事

粘入半切美濃折掛

(朱書)

「凡疋尺九分程」

井上備前守殿 阿部遠江守

天保十四卯年八月十二日

一御勘定奉行井上備前守方々断、私支配御代官
池田岩之丞手附山本寛藏次男、同苗良吉と申
拾七歳罷成候もの、兼々身持不埒ニ付、度々
異見差加候得共、不相用、末々難見届ものニ
付、父寛藏始親類一同、此度追出し、久離致
し度段、相願候間、願之通申付候旨、岩之丞
相届候、為後日相達候由、使者原倍田紋藏申
来候

（朱書）

「奥五寸余白紙也

卯八月十八日

御殿御勝手御掛

井上与市郎殿御渡、寛藏次男ニ無之、

第二候旨御断置候事

此書面は、久離御免相願候節、添可差出品ニ付、
不取紛様渡置可申旨、古き書留有之、本紙駿府正
差遣ス」

翻刻「縣令雜書」（藤村）

（朱書）

「粘入半切ミノ折掛」

手附替之儀、奉願候書付

小田又七郎手附

百人組同心持格

高三拾俵式人扶持

石川賢三郎

卯三十四才

右之もの儀、私手附貫請度旨、小田又七郎方々及掛合
候処、故障之儀無御座候旨、返書差越候間、私手附被
仰付被下候様、仕度奉存候、尤手当之儀は、私正被下
候諸入用之内を以、相応可相渡奉存候、依之此段奉願
候、以上

卯九月

（粹朱書）

池田岩之丞 [印]

申渡

池田岩之丞

名代

勝田次郎

覚

小田又七郎手附石川賢三郎儀、其方手附申渡間、手当

之儀は諸入用之内を以、相応可被相渡候

(朱書)「佐々木近江守殿被仰渡

差引

立田岩太郎殿

」

申渡

小田又七郎

石川賢三郎

右は、池田岩之丞手附被仰付旨、奉行衆被仰渡之

(朱書)

「辰九月廿九日

立田岩太郎殿被仰渡

差引

長坂庄八郎殿」

手附之者、御切米、御扶持方御証文、奉願候書
付

御代官

池田岩之丞手附

高三拾俵式人扶持

石川賢三郎

右賢三郎儀、小田又七郎手附ニ而、御切米は当夏御借

米迄、御扶持方は九月分迄請取候処、当九月廿九日、

私手附被仰付候ニ付、御切米は当卯冬渡る、御扶持方

は同壬九月分る、私手形を以請取候様、書替奉行江御

添状之儀奉願候、以上

卯壬九月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切美濃折掛

御殿中之間

」

中山並五郎屋敷境目立会、相済候御届書

池田岩之丞手附中山並五郎屋敷隣、四ッ谷内藤宿久能
町興津鍵之助殿上地、昨七日拝領人江御渡相成候ニ付、
並五郎名代老人差出、目立会相済申候、依之留守居之

もの申上候、以上

卯十二月八日

池田岩之丞手附

川村左五郎印

手附之もの甥、旧離之儀ニ付、申上候書付

覚

交代寄合

生駒鐵五郎家来

桜庭豊太郎

右之もの儀、私手附川村左五郎姉嫁、元生駒大内藏家
来桜庭友之助倅ニ而、去ル西年中両親共相果、其後右
豊太郎義、跡相統仕、引統当時生駒鐵五郎方ニ被召仕
罷在候処、免角遊興而已相好、身持不宜、不行跡もの
ニ付、度々異見差加候得共、相用不申候間、通路差留
置候処、当月三日、主人屋敷出奔いたし、行衛不相知
旨、同藩之もの申越候間、兼而通路差留置候ものニ
付、差構不申段、及挨拶置候、右跡不行跡もの、此上
立歸り本心ニ立戻へく見詰も無御座、行先何様之儀、

可仕出も難計ニ付、親類相談之上、旧離仕度旨、左五
郎申聞候間、此段申上候、以上

辰五月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切

美濃折掛」

私手附、久能山参詣之儀、奉願候書付

覚

私手附

高橋古 助

中山並五郎

山本寛 藏

右之もの共、駿府陣屋詰罷在候間、廻村之節、久能山
御宮参詣之儀、相願候ニ付、此段奉願候、以上

辰四月

池田岩之丞

(朱書)

「御殿

粘入半切ミノ折掛」

手附取人之儀、奉願候書付

元御代官

野村彦右衛門手附当分出役

当時御普請役元ノ進退

庭井啓助

卯式十三歳

右啓助儀、私役所人少ニ付、当分借請、当三月中、其

段御届申上、相勤罷在候処、先般彦右衛門儀、御役替

ニ相成、啓助儀は、御普請役元ノ進退ニ罷成候得共、

私手附ニ相願度、彦右衛門方并御普請役元ノ互も、及

掛合候処、故障之筋も無御座候趣、返書差越申候間、

私手附当分出役被仰付候様仕度奉存候、尤手当之義は、

私立被下置候諸入用之内を以、相渡候様可仕候、依之

此段奉願候、以上

卯四月

池田岩之丞

(朱書) 「粘入半切

美濃折掛」

以手紙致啓上候、弥御安泰被成御勤、珍重奉存候、然

ハ元御手附庭井啓助儀、当二月中及御掛合、御借請相

勤罷在候処、先般御役替ニ付、御普請役元ノ進退罷成

候得共、岩之丞手附ニ相願申度候、故障之筋は無御座

候哉否、貴報被仰聞可被下候、右可得御意旨、岩之丞

ノ申越、如斯御座候、以上

四月廿日 池田岩之丞手附

山崎信太郎

川村左五郎

野村彦右衛門様元御手代

原 与兵衛様

籠宮魯九郎様

以手紙致啓上候、然ハ元御代官野村彦右衛門殿手附当

分出役庭井啓助儀、岩之丞役所人少ニ付、当三月中、

彦右衛門殿立及掛合、借請相勤罷在候処、先般御進退

ニ相成候得共、岩之丞手附ニ相願度、故障之筋は無御

座候哉否、貴報ニ被仰聞候様仕度奉存候、右可得貴意
旨岩之丞ヲ申越、如此御座候、以上

池田岩之丞手附

四月廿日

山崎信太郎

(朱書)「御普請役元ノ」

藤井円四郎様

川村左五郎

申渡

池田岩之丞

名代

嶋田帶刀

御普請役元ノ進退庭井啓助義、其方手附当分出役申渡
間、手当之義は、諸入用之内を以、相応可被相渡候

(朱書)「卯五月廿二日

梶野土佐守殿被仰渡

差引

金田藤三郎殿」

申渡

御普請役元ノ進退

庭井啓助

右は、池田岩之丞手附当分出役被仰付旨、奉行衆被仰
渡

手附当分出役御免相願候ニ付、申上候書付

御勘定所

御料所手附

庭井惣兵衛倅

私手附当分出役

庭井啓助

右啓助儀、元御代官野村彦右衛門手附当分出役相勤罷
在候処、私役所人少ニ付、当二月中、当分借請、其段
御届申上置候処、彦右衛門儀、先般御役替、啓助儀は、
御普請役元ノ進退罷成、当五月中、私手附当分出役被
仰付、出精相勤罷在候処、其以前ノ眼病相煩、種々療
養仕、一旦快、出勤仕候処、又候六月中ノ再発仕、何
様療治仕候得共、不相勝、末々勤統候様ニ無御座候ニ
付、手附当分出役御免被成下度旨、相願候間、手附当

分出役御免被仰付候様、仕度奉存候、依之、此段奉願候、以上

卯七月

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切美濃折掛」

申渡

池田岩之丞手附当分出役

庭井啓 助

名代

山崎亥三郎

右は、病氣ニ付、願之通手附当分出役御免被成旨、奉行衆被仰渡之

(朱書) 「卯七月廿五日

増田金五郎殿被仰渡

御名代

差引

勝田次郎殿

志賀六左衛門殿

紛失物御届書

覚

一木綿紺堅縞四布蒲団

沓ッ

但、裏花色木綿

右は、私屋敷門番所ニ而、一昨六日昼八ッ時頃、召仕候中間戸立寄セ、便所ニ参り候内、書面之品、致紛失候段申聞候、全盜賊之仕業ニも可有之哉、何ニ而も心当り無御座候、尤別段御吟味之義は、不申上候得共、此段御届申上置候、以上

卯正月八日

池田岩之丞

(朱書)

「粘入半切美濃折掛

御殿松野熊之助殿立出ス」

紛失物御尋ニ付、御答書

当正月上旬頃、当屋敷中間部屋ニ而木綿縞蒲団紛失いたし候義、有之哉之旨、御問合御座候

此段、当正月六日昼八ッ時頃ニも候哉、召仕中間太助門番所内ニ入口メリ無之、立寄置候而便所

正参り居候内、盜賊同所へ入出いたし候様子ニ相見へ申候、前書門番内正取出し有之

一木綿縞四布蒲団 壹枚入

紛失仕候

右御問合ニ付、此段御答申上候、以上

御代官

池田岩之丞手代

卯正月十八日 脇谷此太印

太田運八郎様御組 表式番丁法眼坂上

江原清之助殿

被差越候間、此段申達候、可然取計有之候様存候、以上

二月七日

猶以、追本文之次第、可申聞候、以上

池田岩之丞殿

元ノ手代 渡一兵衛

太田運八郎

御代官

池田岩之丞手代

脇谷此太

紛失物御尋ニ付御答書

池田岩之丞手代

脇谷此太

右は、先達端紛失似寄之品、為見可申候間、不及差添、明八日四ツ時、拙者方正差出候様、岩之丞正御申渡可被成候

卯二月

別紙之通、岩之丞殿手代脇谷此太、明八日、太田運八郎方正差出方之義、運八郎之違書、唯今備前守殿へ

池田岩之丞手代

脇谷此太

右之もの、明八日、太田運八郎方_ニ可差出旨、御達之趣承知仕候、右為御請申上候、以上

池田岩之丞手附

卯二月七日

川村左五郎印

(朱書)

「右、太田運八郎殿_ヲ達_ニ而は、脇谷此太紛失いたし候様相聞候間、其段掛り与力田中忠太郎_ニ断およひ候処、全中間太助召連可罷出旨、達可有之処、書損_ニ付、右之趣差心得具様、断同人_ヲ申聞候事」

太田運八郎方_ニ手代差出候儀_ニ付、申上候書付

私手代脇谷此太、一昨八日、太田運八郎方_ニ可差出旨御達_ニ付、差出候処、当二月八日、御届申上置候中間太助、紛失木綿四布蒲団、運八郎組之もの召捕候盜賊所持之内、似寄候品有之候間、呼出候趣_ニ付、為見届候処、相違無之、右品先預_ケ置候旨、組与力田中忠太

郎_ヲ申聞、相渡候_ニ付、請取歸り候旨、手代申聞候、依之此段御届申上候、以上

卯二月十日

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「御殿中之間、和田庄兵衛殿差出ス」

以手紙申入候、然は別紙之通、太田運八郎_ヲ相達候旨を以、土佐守殿_ヲ御差越_ニ付、則写相達候、明四日刻限不遅様御差出可有之候、以上

三月三日

猶以差出候否、明朝

御殿_ニ可被相届候、以上

池田岩之丞殿

元_ノ手代

中 平四郎

写

太田運八郎

御代官

池田岩之丞

中間

太助

右は、申渡義有之候間、召連人差添、明四日四時、拙者方_ニ差出候様、御申渡可被成候、以上

卯三月

池田岩之丞

中間

太助

右之もの、明四日召連人差添、太田運八郎方_ニ可差出旨、御達之趣、承知奉畏候、右為御請申上候、以上

池田岩之丞手附

三月三日

川村左五郎印

太田運八郎方_ニ家来差出候儀_ニ付、申上候書付

私召仕中間太助儀、差添人召連、昨四日太田運八郎方_ニ可差出旨、御達_ニ付、家来差添差出候处、当正月中

御届申上候、右太助所持之品紛失物之義、盜賊は入牢中病死いたし、被盜候品は、先達_ニ當人_ニ相渡候_ニ付、此上掛合無之旨、与力横山清右衛門_ノ申聞候、依之此段御届申上候、以上

卯三月五日

池田岩之丞印

御勘定所

元手附当分出役奥野新三郎儀_ニ付、御内々奉伺候書付

元手附当分出役

奥野新三郎

当卯五拾五才

右新三郎父奥野右源太儀、元御代官平岡熊太郎役所勤中、御林損木之儀_ニ付、一ト通御尋有之候迄_ニ而、同人役所相勤罷在候内病死仕、御切米、御扶持方共被召上、悴新三郎儀は、元御代官和田主馬役所元_ノ手附当分出役相勤罷在候处、右源太儀病死仕候_ニ付、新三郎身分之儀、主馬_ノ奉伺候处、是迄通相心得、右一件落

手代抱入伺書

和田主馬

元手附当分出役當時浪人

奥野新三郎

当卯五十四才

湯嶋天神門前町

家持

町請人 慶次郎

着いたし候ハ、身分之儀、相伺可申旨、御下知有之、相勤罷在候処、主馬儀、御役替被仰付候ニ付、新三郎御普請役元メ進退被仰付罷在候処、先般右一件落着仕、然ル処同人家名此儘及断絶候も、不便之儀ニ有之、右源太儀は、亡父仙九郎方年来相勤候者ニも有之候間、可相成儀ニ御座候ハ、今般新三郎儀、改而私手代ニ召抱候様被仰付度、右之趣伺書差出候ハ、御下知可被成下ものニ御座候哉、御内ニ奉伺候、以上

「天保十四」(朱書)

卯八月

池田岩之丞

(朱書)

「御引請、勝田殿々嶋田殿御頼、竹内清太郎殿九日御差出之事」

元メ御呼出ニ付、罷出候処、御内慮伺之通、抱入伺早々取調、引請之もの持参可差出旨、長坂庄八郎殿々御談ニ付、請書可差出旨申上候処、請書ニは不及旨、被申聞候事

卯壬九月

川村左五郎

「

右新三郎父奥野右源太儀、平岡熊太郎役所勤中、御林損木調方之儀ニ付、御吟味中病死仕、御切米、御扶持方共被召上、俸新三郎儀、其節和田主馬元メ手附当分出役相勤、相勤罷在候処、同人儀、去寅六月中願之通、小普請入被仰付候処、右一件、当卯五月中落着仕、同人儀、御構無之候ニ付、元メ進退差除ニ相成候間、私手代ニ召抱申度、主馬及掛合候処、同人役所勤中、故障之義無之旨、申越候ニ付、新三郎儀、今般私手代ニ召抱候様仕度奉存候、尤支配所内、親類縁者無御座候、依之右返書相添、此段奉伺候、以上

天保十四卯壬九月

池田岩之丞印

(朱書) 御勘定所

「右於御取ヶ差出方、竹内清太郎、御立会、長坂左八郎殿立請書差出」

「右伺之通、御下知相濟候段、被仰渡承知奉畏候、

右御請申上候、以上

卯壬九月廿六日 池田岩之丞手附

川村左五郎

元ノ取立伺書

私手代

奥野新三郎

当辰五拾五才

右新三郎父奥野右源太儀、平岡熊太郎手附勤中、御林損木調方之儀ニ付、御吟味中病死仕、御切米、御扶持方共被召上、新三郎儀、其節和田主馬元ノ手附当二分出役相勤、相勤罷在候処、主馬儀、願之上小普請入被仰付、新三郎義ハ、御普請役元ノ進退被仰付候処、右一件落着仕、同人儀、御構無之、元ノ進退差除相成、元当分出役勤中、年来元ノ相勤候ものニ而、私方由緒も

翻刻「縣令雜書」(藤村)

有之候間、伺之上、私手代ニ召抱候処、貞実ニ而御用向相并、出精仕候間、元ノニ取立候様仕度奉存候、此段奉伺候、以上

(朱書)

天保十五辰年八月「四日」池田岩之丞印

御勘定所(朱書)

「御出掛高林清左衛門殿を以

(朱書)

竹内清太郎殿立出ス」

「右伺之通、御下知相濟候段被仰渡、承知奉畏候、御代官立申聞候様可仕候、右為御請申上候、以上

池田岩之丞手附

辰九月十二日

川村左五郎印

於御取ヶ方竹内清太郎殿被仰渡

差引田中庄次郎殿立請書出ス

戸川播磨守内

池田岩之丞様

畑 弥平次

御手代中

敷山儀 助

難波源 助

御手代

中根弥八郎

右被相尋儀、有之候間、明九日四ツ半時、鍋嶋内匠頭様御役所江御差出可被成候、此段可申入旨、播磨守申付候、以上

辰五月八日

鍋嶋内匠頭殿江手代差出候御届書

手代

中根弥八郎

右之もの江御尋筋有之候間、昨九日、鍋嶋内匠頭方江可差出旨御達ニ付、差出候処、同人舎弟彦之助と申もの、身持不宜家出いたし、道路ニ打臥罷在、召捕相成候処、別段不埒之筋無之候間、弥八郎江引渡ニ相成、右ニ付家出之始末、以書面可申立旨達ニ付、此段御届申上候、以上

辰五月

池田岩之丞印

始末書

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎

私厄介弟彦之助と申もの、道路ニ打臥罷在、御召捕御糺御座候処、吉原町遊女屋両三軒江罷越候段申立、右は道路ニ打臥候程之もの、遊興等相催廉不審ニ付、家出之始末、其外御尋之趣、承知仕、始末左ニ申上候一彦之助儀、両三ヶ年以前々市中遊歩行候儀を好、身持不宜、亡父存生中度々異見差加候得共、心庭立直り不申、然ル処、去暮父病死仕候ニ付、無廻私方厄介ニ引取養育仕、異見度々差加、稽古事等嚴重申付候得共、辛抱不仕、勝手儘ニ他出、両三日、又は五六日も帰宅不仕義、間々有之、無謂数日家出罷在候段、難心得候処、渡置候着類等質物ニ差入、吉原町江遊興ニ罷越候段、及承り、厄介之身分、旁以之之外之義ニ付、親類共

一同、種々再応異見差加候得共、更ニ其詮無御座、仍而親族相談之上、旧離をも可仕處、右は不容易義ニ付、勘弁之上、去月中旬より手当仕、宿元ニ差置候處、同下旬、其場を遁れ出候儘不立帰、心当り之所々尋中、御召捕相成候段、御達ニ付、承知仕候儀ニ而、吉原町ニ罷越遊興等仕候段ハ、家出以前之儀ニ御座候

右御尋ニ付申上候、以上

御代官

池田岩之丞手代

辰五月

中根弥八郎

鍋嶋内匠頭殿ニ手代差出候御届書

手代

中根弥八郎

右之もの義、先達而鍋嶋内匠頭殿ニ呼出有之、其節御届申上候同人厄介、弟彦之助身持不宜、家出いたし候始末書、為差出候處、昨十三日、同人義、弥八郎ニ引渡、預ケ相成申候、依之御届申上候、以上

辰五月十四日

池田岩之丞印

池田岩之丞様	戸川播磨守殿
御手代中	畑 弥平治
	敷山儀 助
	難波源 作

鍋嶋内匠頭様々前別之通、御達書を被御申越候間、則写差通差進申候、御手代中根弥八郎方ニ預ケ被置候同人弟彦之助召連、明廿日四半時、右弥八郎方内匠頭様御役所ニ可被差出候、此段可申入旨、播磨守申付候、以上

五月十九日

写

先達而預ケ置候

御代官

同人厄介之弟彦之助

池田岩之丞手代

召連可出

中根弥八郎

右之ものニ相尋候儀有之候間、明廿日四半時、拙者御

役宅^正差出候様、御申渡可被成候、以上

五月十九日

中根弥八郎

同人手附

卷 人

鍋嶋内匠頭殿^正手代差出候御届書

手代

中根弥八郎

辰七月朔日

右之もの共^正相尋候儀、有之候間、明二日四半時、拙者御役所^正差出候様、御申渡可被成候、以上

右之もの厄介弟彦之助儀、鍋嶋内匠頭殿^正先達而弥八郎^正預ケ相成、其節御届申上置候処、昨廿日内匠頭殿^正弥八郎一同可差出旨、御達^正ニ付、差出候処、彦之助家出之始末、下口上書調^正ニ付、尋有之引取申候、依之御届申上候、以上

辰五月廿一日

池田岩之丞印

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎弟^正而

出奔いたし候

中根彦之助

右

鍋嶋内匠頭殿方^正手代差出候御届書

私手代

弥八郎厄介弟

中根彦之助

右

中根弥八郎

右之もの共^正御尋之義、有之候間、昨十六日、鍋嶋内匠頭殿方^正可差出旨、御達^正ニ付、差出候処、先達而追

御届申上候彦之助儀、身持不宜家出いたし、道路ニ
打臥罷在、召捕相成候一件口上書読聞、爪印相済、追
而沙汰可有之旨御申渡、引取申候、依之御届申上候、
以上

辰六月十七日 池田岩之丞印

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎弟ニ而

出奔いたし候

一押込

中根彦之助

其方儀、身持不宜、兄弥八郎度々異見差加候得共、
不相用故、一間立押込置候処、氣詰ニ存出奔いたし、
無刀ニ而立廻り罷在候始末、不埒ニ付、押込申付ル
右之通、被仰渡奉畏候、急度相慎可罷在候、仍如件

右

天保十五辰年七月二日 中根彦之助

一右、中根彦之助儀、阿伊勢守殿依御差図被仰渡候前

翻刻「縣令雜書」(藤村)

書之趣、其筋立可申立様被仰渡、奉畏候、以上

池田岩之丞手附

山崎亥三郎印

鍋嶋内匠頭殿方立手附手代差出候御届書

私手代

中根弥八郎弟ニ而

出奔いたし候

右

中根彦之助

中根弥八郎

私手附

宅人

右之もの共立御尋之儀、有之候間、昨日鍋嶋内匠頭
殿方立可差出旨、御達ニ付、差出候処、先達而追御
届申上候彦之助儀、身持不宜家出いたし、道路ニ打臥
罷在、召捕相成候一件、同人義、身持不宜、兄弥八郎
度々異見差加候得共、不相用故、一間立押込置候処、
氣詰リニ存、出奔いたし、無刀ニ而立廻罷在候始末、

不埒ニ付、阿伊勢守殿依御差図、押込被仰付、弥八郎儀は、不念之筋無之ニ付、無構段被申渡、右之趣、其筋立可申立旨、手附之もの立申渡ニ付、請書差出引取申候、依之御届申上候、以上

辰七月三日

池田岩之丞印

右之通、鍋嶋内匠頭様御達有之候間、明十四日朝六時、御同人様方立被差出候様、可申入旨、四郎申付候、以上

十月十三日

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎第二而

出奔いたし候

中根彦之助

松平四郎内
池田岩之丞様 藤城仙 蔵

元ノ御手代中 堀越新 助

長坂佐一郎

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎第二而

出奔いたし候

中根彦之助

右之もの立御尋御座候ニ付、召連人差添、明十四日六時、鍋嶋内匠頭様御役所立可差出旨、御紙上之趣、承知奉畏候、右為御請申上候、以上

池田岩之丞手代

奥野新三郎

十月十三日

同人手附

川村左五郎

宛所

右之もの立相尋候儀、有之候間、召連人差添、明十四日朝六ッ時、拙者御役所立差出可申旨、可被仰渡候、以上

十月十三日

御代官

池田岩之丞手代

中根弥八郎弟ニ而

出奔いたし候

中根彦之助

其方儀、先達而押込申付置候処、日数相立ニ付、差免

右

中根弥八郎親類

差添

御代官

小田又七郎手代

大門庚 三

右之通申渡間、得其意、御代官^ニ可申聞

(朱書)

「辰十月十四日

鍋嶋内匠頭殿御役宅ニおゐて、御同人被仰渡候事、右大門

庚三罷出申聞候事

」

私手代中根弥八郎弟彦之助、鍋嶋内匠頭方^ニ差

出候儀ニ付、申上候書付

私手附

中根弥八郎弟ニ而

出奔いたし候

中根彦之助

右之もの^ニ尋之儀、有之候間、召連人差添、昨十四日朝六ツ時、鍋嶋内匠頭方^ニ可差出旨、御達ニ付、親類之もの差添、差出候処、右之もの、先達而押込被仰付置候処、日数相立候ニ付、差免候段被申渡候、依之此段御届申上候、以上

辰十月十五日

池田岩之丞印

手附借請御届書

小田又七郎手附

石川賢三郎

右之もの儀、私役所人少ニ付、当分借受申度旨、又七郎方^ニ及掛合候処、故障之儀無之、承知之旨、返書差越申候間、当分借請申候、依之此段御届申上候、以上

卯七月

池田岩之丞印

御勘定所

木佐森姓改

須川良助

書役暇差出之儀伺書

覚

書役

吉田啓太郎

右之もの、在所ニ罷在候母、病氣之由申越候ニ付、罷越介抱仕度段、去ル辰年五月中、相願候ニ付、承届差遣置候処、母全快も手間取、其上同人儀も病氣ニ而、早速帰参も難相成、永暇申請、心永ニ療養仕度旨、相願候ニ付、願之通、暇差出候様、仕度奉存候、依之奉伺候、以上

「文政六年」(朱書)

未二月

池田仙九郎印

御勘定所

伺之通御下知下済

手代改姓御届

私手代

右、木佐森良助儀、書面之通、改姓仕度旨相願、故障無御座候ニ付、承届申候、依之御届申上候、以上

「文政六年」(朱書)

未五月

池田仙九郎印

御勘定所

(朱書)

「右村田幾三郎殿江御直御差出之事」

進物取次上番明跡江手附之者、奉願候書付

覚

池田仙九郎手附

進物取次上番持格

高式拾俵式人扶持

中山右一郎

申四拾三才

右、右一郎儀、寛政十二申年七月、従部屋住、元御代官岡田清助手附相勤、其後引続私手附ニ被仰付、当年迄、都合式拾六ヶ年目勤、御奉公無滞相勤、筆算

達者ニ仕、差働も有之、御用立者ニ御座候ニ付、此度進物取次番之頭、川野金蔵組、進物取次上番明跡御座候ニ付、可相成儀ニ御座候ハ、右、右一郎進物取次上番被仰付被下置候様、於私奉願上候、一統励ニも相成候義御座候間、此段偏ニ奉願上候、以上

「文政七年」（朱書）

申三月

池田仙九郎

（朱書）

「古山善吉殿御願御差出

御殿中之間、中川忠五郎殿御請取之由」

當時御咎等被仰付候もの無之趣、申上候書付

當時閉門逼塞差扣遠慮被仰付有之候もの、名前訳書委細書上候様、御書付御廻状之趣承知仕候、私并手附手代共御咎等被仰付候もの無御座候、依之此段申上候、以上

辰五月

御勘定所

池田岩之丞印

御目見御番入不相願儀ニ付、申上候書付

御目見御番入願御調ニ付、忝共名前歳附并是迄

御目見相済候有無并願書等差出分は、当月十日迄ニ可差出旨、御廻状ヲ以、御達之趣承知仕候、然ル処、私忝碇三郎儀、当已二十三才ニ相成、未御目見御番入不相願間、今般願書可差出処、私手前駿府紺屋町陣屋ニ罷在候間、此節、右願書差出不申候、依之此段申上候、以上

已二月

池田岩之丞印

御勘定所

御目見以下、以上被仰付候もの、無之義ニ付、申上候書付

去辰年

御目見以下、御目見以上被仰付候もの并一代

御目見之場所被仰付候もの、且御目見以上被仰付、其後御役替有之候もの共、可書上旨、御廻状を以御達之趣承知仕候、私手附之内、右様之もの無御座候、依

之此段申上候、以上

巳二月

池田岩之丞印

御勘定所

御達之趣承知仕候、然ル処、私并手附之もの右 上

覽御見分請候もの無之候間、武芸短冊取調差出不申候、

依之此段申上候、以上

巳四月

池田岩之丞印

御勘定所

(朱書)

「御殿立差出」

芸術御見分請候もの無之義ニ付、申上候書付

学問武術師範致居候もの、其外之義ニ付、御目付方

御達有之候ニ付、免許以上之分は、奉行衆御見分可有

之、御見分請候もの、芸術書付且有無共可申上旨、御

廻状を以、御達之趣承知仕候、私并手附之もの、前書

御見分請候もの無御座候、依之此段申上候、以上

巳四月

池田岩之丞印

御勘定所

武芸短冊不差出儀ニ付、申上候書付

年々定式武芸

上覽并御見分有之候間、可相勤ものは、兼而差出候振

合ニ而、短冊相認め名順書相添、当月晦日迄ニ差出候

様、御目付方御達ニ付、取調可差出旨、御廻状を以、

